



幸福市場

喜多隆斗



—

八月の日差しは焼け付くようだった。朝から気温は上がり続け、公園を散歩する人影もない。炎天下の公園ほど、人の目を避けられる場所もそうないかもしれない。

吉岡勝一はベンチで苛ついている男を、木々の合間からそっと窺った。間違いない。先日合田という借金取りと一緒にやってきたちんぴらだ。二十歳前後だろうか。八月の日差し同様、ぎらぎらとしたエネルギーを発散していた。きっとこの男ならやってくれるだろう。吉岡は男に向かって歩き出した。

男はすぐに吉岡に気が付き、険のある目を向けた。そして何か満足気な笑みをたたえた。これから起るであろうことへの期待感に、一人ほくそ笑んでいるのだろう。

「武藤さんだね」

吉岡が声をかけると、武藤と呼ばれた男は吉岡を見てからぺっと唾を吐いた。

「てめえ、こんなくそ暑い中、人を呼びだしておいて、いい話じゃなかったら……」

武藤は先を続けなかった。

殺すぞ、とでも続けるつもりだったのだろうが、吉岡のすさみきった、どこか危険な光を帯びた視線に何かを感じ取ったようだ。

殺すぞか。それも悪くない。吉岡はにやりと笑った。

「そう熱くなるなよ」

吉岡は武藤の横に腰掛けると、厚手の封筒を武藤の膝の上に置いた。

武藤が怪訝な顔を向けてきた。

吉岡は武藤が口を開く前に言った。

「これはあんたにだ。三十万ある」

武藤の顔が益々曇っていく。金があるなら借金を返せと言いたいのだろう。

「借金とは別に、あんたに頼みがある」

「てめえ俺を舐めてるのか。てめえのせいで、兄貴がどうなったか忘れたとは言わせねえ」

「なら益々都合がいいじゃないか。頼みというのは」

吉岡は一旦言葉を切り、自分の運命を左右するであろう男の顔を見つめた。意志の強そうな目をしてるが、暴走しそうな危うさを持っている。迷いはなかった。賭けるしかない。やつらに対抗するには他に手だてがないのだ。

「俺を殺してほしい」

武藤の口があぐりと開いた。無理もない。金を渡して自分を殺せなどと言うのは馬鹿以外にいない。

「これは前金だ。成功報酬としてあと七十万ある。うまくいけば残りが入ったコインロッカーの鍵を渡そう」

武藤が大笑いを始めた。頭がいかれていると思っているのだ。

馬鹿。そう今はいかれた馬鹿男になるしかない。生き残るためには。吉岡は武藤に合わせて自分も笑い始めた。炎天下の公園に狂ったような馬鹿笑いが響いた。吉岡は笑いながら、冷静な心で奇妙ないきさつを思い返した。



六月の暗い空がどこまでも広がっていた。もうすぐ梅雨がやってくる。いやな季節だ。吉岡は小さな改札を抜けると、なるべく空を見ないようにして駅前坂を下り始めた。吉岡勝一は今年四十になる。背は低い方ではないが、線が細いせいとか、あまり大柄にみられることはない。洒落たデザイナーズブランドのジャケットがよく似合ったが、落ちぶれた今では望むべくもない。よれたシャツに安物の上着のせいで余計に貧相に見えた。余裕がないので仕方ないが、髪は伸び放題だし、鬚も満足に剃っていなかった。そして何より、力の無い瞳が正しく今の曇り空と同じであった。

吉岡が曇り空を見上げない理由は、曇りが嫌いなだけではなかった。今日の天気のような気持で、帰郷しなければならないことが、思わず足許を見つめさせてしまうのだ。吉岡は東京を捨てて、生まれ故郷である千葉県に舞い戻ってきたのだった。

最初の交差点でつと足が止まった。

どちらに行くか考えあぐねていたためだ。

この街は確かに生まれ故郷であったが、もう帰る実家はなかった。吉岡の両親はとうの昔に亡くなっていた。

吉岡はしばし思案して、左に曲がった。右に曲がれば街の中心に向い、繁華街に出る。左に曲がると寂れた飲み屋街になる。そういった場所にはたいてい、日雇い労働者向けの安宿があるものだ。東京に出ていく時には見向きもしなかった場所だ。だが今ではそういった場所の方が自分に似合っている気がした。

吉岡の頭上でカラスがけたたましく鳴いた。見上げると一羽のカラスが大きく羽を広げ、挑むような目で見つめていた。そしてもう一度鳴くと飛び去った。飛び去った方角には、そこだけ鬱蒼とした木々がかたまった、小山のような一角があった。

天岳寺であった。

吉岡は天岳寺から目を逸らすと、飲み屋街に向かって歩き出した。

吉岡は少し前まで、東京の小さな出版社を経営していた。バブル全盛の時期には、吉岡の扱う雑誌も十分に売り上げを伸ばしてた。金も十分にあった。公私共に全てが順調だった。

ところがバブルが弾けると同時に、出版社は急激に業績が悪化した。そして先日倒産した。

「幸せだったなあ」

吉岡はぼつりと呟いた。

呟いてから、誰かが見ていないか辺りを伺った。

実は吉岡には倒産だけでは済まない理由があった。好調な時期に借金をしてリゾートの土地を購入したのだ。バブル崩壊と同時に地価は下落し、今や二束三文で買い手もつかない。

そして借金取りが家にやってくるようになった。

女房は去り、家は競売にかかった。それでも借金はなくなり、友人宅を転々としたのち、地元へ逃げ帰ってきたのだ。自己破産をしなかったのは、相手がやくざだったからだ。破産をしたら夜中に襲って、五体をばらばらに切り刻み、内臓を売り払う、と脅されていた。

吉岡は宿を見つけると、どこにも出かかず、二日間宿でくすぶっていた。安酒を買っては飲み、ごろごろとしていた。うまく気持の整理をつけられず、どうしてよいか分らなかった。

吉岡が地元へ舞い戻ってきたのには理由があった。他に行くところが思いつかなかったせいもあるが、本当は友人の家に暫く世話になるつもりだった。

しかし今までの友人たちのあしらいを考えると、気が進まないのも事実だった。友人たちは誰も彼も、吉岡のことを同情と軽蔑の合わさった目で見たと。その視線に晒されることが耐えきれず、どの家にも一週間といられなかった。吉岡が出て行く、と告げると、友人たちはきまってほっとした表情を見せた。

今回世話になろうと考えている友人は、きっと、喜んで吉岡を受け入れてくれるだろう。

その友人は足立洋一という幼なじみだった。

ただ、幼なじみにまで惨めな姿を晒すことになる。そのことへの折り合いがなかなかつけられなかった。

三日目の晩、吉岡は宿の薄いせんべい布団に転がり、二段ベッドの上段を見つめていた。

宿の部屋はどこも八人部屋で、二段ベッドが四つ備え付けられていた。客は年嵩のいった日雇い労働者が数人いるだけで、吉岡のいる部屋は昨日まで吉岡一人だった。

今日突然むさ苦しい男が入ってくると、他のベッドは空というのに、どういう訳か、吉岡のベッドの上段に上がった。鬱陶しかったが、別段害もないので気にしないことにした。

しかし夜になると男は猛烈ないびきをかき始めた。

することもなく、いびきも気になり、無性に酒が飲みたくなった。だが友人から無心した金が底をつきかけていた。暗がりでもベッドの天上板を見つめているしか無かった。ベッドの上段では大きないびきが響いたり、止まったりを繰り返していた。

いびきがうるさくて眠れそうにないので、外の風にあたることにした。きっと最後の金で酒を買ってしまうのだろう、と思いながら引き戸に手をかけると、扉が勝手に開いた。

吉岡は驚いて手を引っ込めた。見ると目の前に老婆が立っていた。

老婆は寢床から這い出してきたような、乱れた髪と寝間着姿だった。爛々と輝く目は一心に吉岡を見つめていた。点滅する非常灯の薄明りが不気味さを際だたせていた。

「よう帰って来た。よう帰ってきた」

老婆は言うなり、吉岡の手を握りしめた。

「何だあんた」

吉岡が手を振り払うと、老婆は部屋へ踏み込んで来て、シャツにしがみついた。

「これでワシも安心じゃ。枕を高くして眠れる。やっと眠れる」

「放せ」

大きないびきが、ぐおう、と鳴って止まった。

八人部屋にはこのいびき男と、自分、そして突如乱入してきた老婆しかいなかった。踏み込んで来た老婆は暗い陰のせいで、まるで空間にぽっかり空いた黒い洞窟のように見えた。

吉岡は窓際まで後退った。なんだかひどく禍々しいものに触れられたみたいで、しきりに老婆に握られた手をズボンでぬぐった。

老婆は入口から入ったところで、地蔵のように固まり、一步も動かなかった。その黒々とした陰が、部屋に強烈な圧迫感と息苦しさをもたらしていた。

吉岡の額から汗が噴き出た。

ベッドの男が今までにない巨大ないびきをかき、そしてまた静かになった。

いびき男に目を向けた一瞬非常灯が消え、その間に老婆の姿はなくなっていた。入口には間の抜けたような空間が広がっていた。廊下の非常灯がじりじりと音を立てながら、不規則な点滅を繰り返していた。吉岡には老婆が去ったのか消えたのか分らなかった。

次の朝、吉岡は早々に宿を引き払った。金も無かったが、あの部屋にいたくない、というのが理由だった。結局不気味な老婆のせいで、朝まで眠ることはできなかった。僅かな残金でそばを食べると、もう電車に乗ることもできなくなった。あとは足立の家に行くしかない。覚悟を決めて歩き始めたが、すぐに歩調は鈍り、十分後には公園のベンチに腰を下ろしていた。

たいして広くもない公園で、子供が楽しめそうな遊び物はほとんどなかった。緑は豊富だが、若干暗い。しかしなんとなく心が落ち着く公園だった。

吉岡は暫くベンチでぼうっとしていた。

いつの間にやってきたのか、向いのベンチには薄汚い老人が座っていた。老人はささくれた大きな手を、染みだらけのズボンの膝に置き、小さく抜け目なさそうな目で、じっと吉岡のことを見つめていた。

気味が悪くて吉岡は公園を出た。もう行くところはどこにもない。行き着くところは足立の所しかなかった。

区画整理されていない、迷路のような住宅地の一角に、そこだけ墨を塗ったような黒々とした、鬱蒼と木が茂る場所があった。完全に住宅街から隔絶された異次元のような一角だ。小山のような木々はわき出るように四方八方へ伸び、威圧的でした。吉岡はその木々と住宅街の境目に立った。目の前には石で出来た鳥居があり

「天岳寺」

と書かれた札が賭けられていた。吉岡は札を見上げた。この街を飛び出したときには、こんな未来が待っているなどと、微塵も思わなかった。幸福とはほど遠い未来が。

吉岡はみじめな気持で鳥居をくぐり、境内へ続く数十段の石段を昇りはじめた。石段を進むうちに奇妙な感覚に襲われた。本当に異次元に紛れ込んだような感覚。住宅街を歩いていた時の生活感が全く消え去り、自分がどこにいるのか一瞬わからなくなった。だが石段を登りきり、しめった土の臭いのする境内にたどり着くと、再び後ろめたさがずっしりと肩にのしかかった。これから足立に、世話になる、と言わねばならないことに大きな引け目を感じた。

さして大きくない本堂の脇をすり抜けて進むと、少し奥まったところに住居がある。吉岡はしばし躊躇してから、呼び鈴を押そうと手を伸ばした。

すると引き戸が勢いよく開け放たれた。驚いた吉岡が後退ると、目の焦点が合わないような、どこか惚けた感じの女がふらふらと出てきた。そして吉岡のことが目に入らなかつたらしく、肩からぶつかり、地べたにぺたんとして尻餅をついた。

吉岡はあっけにと取られながらも、大丈夫かと尋ねたが、女は溜息をつき、ただ、

「終わった」

とだけ答えた。

「吉岡。吉岡か」

玄関に男が立っていた。作務衣を着た恰幅のよい、坊主頭の男であった。幼なじみの足立である。

昔見慣れた坊主頭であるが、眼鏡の奥の目は、昔のように人なつっこいものではなく、疲れ切っていた。

「足立。しばらく」

本当はしばらく世話になりたい、と言いたかったのだが、言葉を継ぐことが出来なかった。足立はそれを挨拶と受け取ったのか、何も言わずにただ、ついてこい、という仕草をし奥へ姿を消した。

女はきっと足立の妻であろう。地べたに座り込んだままを放っておくのもどうかと思われるが、何か事情がありそうだったので、軽くお辞儀だけすると、足立を追って中に入った。

入ってすぐに妙な違和感を覚えたが、足立の大きく影のある背にぶつかり、それが何か気づけなかった。

継ぎの間に足立は立ち尽くしていた。何を言うでなく、吉岡が部屋に入っても振り向きもしなかった。ただ時々、不思議なものでも見たかのように、首を少しだけ右に傾げた。足立の視線の先には布団が敷いてあり、人が寝かされていた。枕元には線香。

線香の意味を悟ることなく、その人の顔を見て、吉岡は息を飲んだ。その人は間違いなく、昨日の老婆であった。その老婆が寝かされているのは、寺ではなく、足立の住居である。つまり、あの老婆は足立の母ということだ。

昨日は爛々と輝く目と、異様な行動に考えが及びもしなかった。あれが足立の母であったとは。

そして初めて線香が目に入り、入った時に感じた違和感は死の臭いだと気づいた。

「母だ。覚えているか？」

足立の問いに吉岡は黙って首を振った。

足立は吉岡を見ずに続けた。

「母はここ数年ひどくぼけてしまって。夜な夜な街を徘徊するようになった。それを妻が探しては連れ帰る日々が続いた」

足立は、妻はそんな日々から解放されたので、安心してしまったのだろう、と言った。
吉岡はそんな足立に何と声をかけてよいのか分らなかった。足立はさほど大きくはないが、寺の住職である。

ご愁傷様…

そんな言葉に何の意味もないことぐらい、嫌と言うほど知っている。言葉を探しあぐねている吉岡に足立は続けた。

「母の看病は正直大変だったよ。何度放り出してしまうかと思った。
ところが昨日だ。昨日の晩に限って母は自分で帰ってきた。帰ってきたとき、俺は見違えたよ。昔の母が帰ってきたんじゃないかって。母の顔からは痴呆症特有の、あの惚けたような表情がまったく消えていた。どこか悟ったような、安心きぎった顔をして
いた。そしてただ一言、

『もう安心』

とだけ言った」

吉岡の全身から血の気が引いていった。
これで安心。枕を高くして眠れる。
足立の母は吉岡にそう言った。

「俺は釈然としないものがあった。ここ何年もそんな状態を見たことがなかったから。それでも普通の看病疲れで、追及する気にもなれなかった。母は自ら寝床に戻るし、それ以上何を言うことがあろうか」

足立は吉岡に泣き笑いのような表情を見せた。

「そして朝、母は首を吊った」

吉岡は世界が大きく揺らぐのを感じた。足立の母は吉岡に会った後、首を吊ったのだ

。吉岡に出会い、何かを納得して、そして首を吊った。もし吉岡がこの街に帰ってこなければ、彼女は自殺しなかったかもしれない。自然と目が足立の母の死に顔に向けられた。そして首に、黒々としたロープの後が残っているのを見た。吉岡は目の前がぐるぐると廻るのを感じ、気分が悪くなった。新鮮な空気を求めて外へと飛び出した。
その後のことはよく覚えていなかった。気が付くと公園のベンチに、凭れるようにして座っていた。見れば朝立ち寄った公園だった。吉岡は両手で顔を覆うと、辺り憚らず泣きはじめた。

「今日もお仕事探しに行かれるんですか」

足立の妻は美子といった。美子は日に日に血色が良くなっていった。痴呆症の義母の看病という、大任から解放されたせいだろう。

そして借金をかかえて逃げ回っている、夫の幼なじみという幸せに水を差す存在を、明らかに不満に思っていた。吉岡にはそれがいやというほど分った。言葉の端々に、時折見せる蔑むような視線に、いたるところに吉岡への気持ちが現れていた。

吉岡は黙って頷くと、少しでも家事の手間を省こうと、朝食を食べた食器を重ねて流しに運んだ。

「あらそんなことしなくてもいいですよ」

自分の計画どおりにことが運ばないと、気に障るたちなのか、美子は運んでいる最中の食器を奪い取ろうとした。しかしあまりに勢いが良すぎて、二人でもみ合うみたいな形になり、茶碗が落ちて割れてしまった。美子の鋭い視線が吉岡を射抜いた。

「すみません」

吉岡は慌てて欠片を集めようとしたが、しゃがんだ途端に美子に突き飛ばされて、尻餅をついた。

「いいですから、あっちへ行っていてください」

むくれながら破片掃除をする美子を、吉岡は呆然と見つめた。結局ここにも長くはいられそうもない。だからといって、世話になっていながら美子のことを毛嫌いすることはできない。なんとか円満な関係が続けなければならない。

美子は破片をビニール袋にいれ、台所の隅に置いた。その一角にはこれから捨てられるであろう、様々なゴミが整理して置かれていた。

ふと牛乳瓶のような瓶が沢山並んでいるのに吉岡は気が付いた。足立は昔から牛乳嫌いだった。吉岡は話のきっかけになると思い、瓶のことを口にした。

「牛乳ですか。いまだき瓶は珍しいですね。足立のやつ昔っから牛乳嫌いに通っていたんですが、よく飲ますことに成功しましたね」

美子がびくりと肩を震わせた。

何かまずいことでも言ったのだろうか、と思ったが、どこが悪かったのか分らない。

「人の家庭のことにいちいち口を出さないでください。居候のくせに」

美子は金切り声を上げた。

吉岡は驚き、あっけにと取られたが、黙って退散することにした。これ以上刺激をするのはよくない。怒りの奥にどこか微かな怯えが見え、気になった。だがこれ以上口出しはしないようにしようと誓った。

吉岡は美子の目を逃れるようにして寺を出、仕事を探しにハローワークへと赴いた。壁に張り出された職種をざっと眺めた。しかしどうも自分でできそうな職種がなかった。贅沢を言っている場合ではないのだが、納得できないまま仕事を始めても、結局まわりに迷惑をかけるだけの結果になりかねない。どうせやるなら、きちんと続けられる仕事がしたかった。

何の収穫も得られないまま、吉岡はハローワークを後にした。寺には早々には帰れないし、どうしたものかと思い、ふらついているうちに、いつぞの公園に来ていた。ベンチに腰掛けてポケットの中を漁る。煙草の一本も出てくることはない。出るのは溜息ばかりだ。

そういえば以前ここで妙な老人を見たっけ、などと考えていると、目の前に豪華な刺繍の服を着た男が立ちはだかった。見上げると、法事帰りの足立だった。坊主の袈裟というのは、よく見ると実に豪華な造りになっていた。それに引き替え、自分のみすぼらしさに吉岡は逃げ出したくなった。

そんな吉岡の気持を知ってか知らずか、足立は黙って横に座ると、手提げから煙草を

取り出して一本抜き取り、残りを吉岡に渡した。

「その面を見る限り、いい仕事は見つからなかったって感じだな」

足立は吉岡の答えを待つそぶりはなかった。幼なじみだから性格はよく知っている。吉岡はすぐに黙り込むタイプなのだ。足立はくわえた煙草に火を点けると、ふうっと吐き出した。煙が初夏の風に流されていった。

「いい季節になってきたな。俺は今の季節が一番好きだよ。なんか傲岸なところがなくてさ」

「傲岸？」

「そう。なんて言うかな。適度なんだよ。厚かましくない。人間だってそれくらいがいいんだが、どうしてそういかないのかな。修行が足りないんだなきっと」

足立はそう言って笑った。おそらく法事で一悶着あったのだろう。

「それはそうと、仕事の方なんだが」

吉岡が身構えるのを見て、足立は慌てて付け加えた。

「いや、責めている訳じゃないんだ。ただまだ決まってないなら、俺の知り合いの仕事をして見ないかと思って。どうかな」

「どんな仕事なんだい」

「さあ、わからない。ただし給料はそう悪くないはずだ。檀家の中にいろいろと幅広く事業を手がけている人がいてね、誰かいい人はいないかって言われているんだ。それなら丁度いい人間がいるって言ったら、ご住職の紹介なら間違いがない、是非会ってみたって言うんだ。どうだろう。会うだけでも会ってみないか。どうせ寺に帰りづらくてここにいたんだろう」

足立の指摘に吉岡は帰す言葉もなかった。それに世話になっている上に、仕事の斡旋までしてもらって、断ることができるわけがない。吉岡は会ってみると約束した。

足立は煙草の箱に連絡先が入っている、と言って車に戻っていった。途中立ち止まると、

「それと、うちのやつのかんじは気にしないでくれ。ああいう奴だから。俺がおまえを引き受けると言ったんだから、気兼ねせずにいくらでもゆっくりしてくれ」

と念を押していった。

煙草の箱を覗くと、メモと一万円札が一枚出てきた。電話代のつもりだろうか。それにしても多すぎる。メモには電話番号と「井之方商事 井之方重三」と書かれていた。

井之方重三とは上野の喫茶店で待ち合わせをした。足立に貰った金が早速役立った。あまりみすばらしい格好もできないので、シャツを一枚買って着替えた。繁華街に来ると、どうしても借金取りが気になったが、仕方がなかった。

喫茶店に入ると待っていましたとばかりに呼び出しの電話があった。

「どうも井之方です。もう注文しはりましたか？」

「えっ？まだです」

「そりゃよかった。今日びコーヒーごときが五百円も六百円もする時代や。待つためだけにそんな金払われへん。実は年格好は足立はんに聞いてましたんで、失礼とは思いつつも、外でずっと見張ってましたんや」

「はあ、そうでしたか」

吉岡はえらくせこい、この井之方という人物について、いろいろと想像を巡らした。せこいところがいかにも商売人らしい。

「喫茶店の向いに薬局がありまっしゃろ。実はそこの店内電話を借りてかけてまんのや。薬局まで来てもらえますか」

店内電話とは恐れ入った。吉岡は苦笑しながらもすぐに行くと言った。井之方は自分の方は見ればすぐにこいつや、と分るはずだと言って電話を切った。

注文もせず、電話だけ使って出ていく吉岡を、店員が睨んでいた。だが井之方流で言えば、そんなことは気にするに値しないのだろう。吉岡は少し愉快的気分でも薬局に向った。

薬局は今はやりの量販店で、所狭しと薬が並べられ、セールスの赤札が至るところに貼り付けられていた。客層も化粧品目当ての若い女性が多かった。その中で確かに店に不釣り合いな男が一人いた。

男は小柄で小太り。はげ上がった頭に漫才師でも使いそうな、まん丸の黒縁眼鏡をかけていた。服装も決して金がかかっておらず、小脇には分厚くふくらんだ黒い手提げ鞆を提げていた。

「吉岡はん」

井之方は吉岡を目にするなり、辺り構わぬ大声で声をかけた。声をかけられた吉岡が恥ずかしくなる大声だった。

「まず話は車でしょか。あつ、それと」

井之方は振り向くと、店主らしい人物に手を振った。

「大将。よろしく頼んませ」

どうやら待ち時間を利用して、何かの交渉をしていたらしい。吉岡は大した商売人だと感心した。

大通りから裏路地に入るとすぐに、いかにも悪趣味なベンツが停まっていた。白いボディに金メッキのパーツ。ホイールまで金色だった。ボンネットの、本来メルセデスのエンブレムがある部分には、これまた金メッキの奇妙なエンブレムがついていた。エンブレムは丸の中に井の字がはめ込まれていた。井之方商事の屋号であろう。ということは、吉岡はこのベンツに乗らなければならないということだった。

「格好ええやろ」

「はあ」

「気のない返事やな。まあええか。乗った乗った」

吉岡は車に近づくだけでも恥ずかしかつたのだが、足立の顔をたてて、思い切ってド

アを開いた。

中は外以上にすごかった。全てのシートが虎皮で張られており、ドアを開けると電子音で六甲おろしが流れた。ダッシュボードも虎皮張り、乱雑に演歌のCDケースが乗せられていた。ヤンキー車だってこんなに悪趣味じゃないと思った。

極悪趣味の車で連れて行かれたのは御徒町だった。目抜き通りから一步路地に踏み込むと、そこはもう東京下町そのまま。小さなビル群が並び、こまごまとした店舗がひしめき合っている。路上には看板が溢れ、人と車と自転車が、ごちゃまぜになって移動している。そんな移動するだけでストレスの高まる路地を、更に奥に進むと山手線の高架にぶつかった。ベントは高架沿いに少し進んで停止した。

「こっちや」

「あの、車ここでいいんですか。かなり狭くなってますけど」

ベントの横は車一台なんとか通れるくらいの空きしかない。

「ええのや。ええのや。俺はここの顔やから」

井之方はそう言う気にもせず、すたすたと歩き始めた。吉岡は慌てて後を追った。

井之方が足を踏み入れたのは、数ある雑居ビル群の一棟であるが、ひどく古めかしいビルだった。井之方は入口を入ると、上に昇る階段の脇をすり抜け、廊下を奥に進んだ。廊下の突き当たりには無機質な金属扉が一枚あった。薄暗い、何の装飾もない廊下。天井でじりじりと音をさせている蛍光灯。目の前では禿げたちびでぶが、鍵束をじゃらじゃらいわせている。吉岡は急に不安になってきた。今まで足を踏み入れたこともないような、東京の一角のビルの中で、これから一体何が始まるのか。この男が自分の借金と繋がっていないという保障はどこにもないのだ。

扉がぱんと開くと、むっとする空気が流れ出てきた。汗の臭いのような、ヒモノの臭いのような、あまり快適とは言えない臭い。それに空気自体がどんよりと重く湿っていた。扉の奥には地下への階段が伸びていた。階段は十数段降りたところで折り返しており、その先に何かあるのかは分らなかった。

井之方は人差し指で、来い来い、と吉岡に合図すると、自分はそそくさと階段を降り始めた。

吉岡は扉をくぐることをかなり躊躇した。だが結局くぐった。階段の下からはむっとした空気と一緒に、雑然とした騒音が響いてきた。臭いと騒音が一体となって吉岡の延髄を揺さぶった。吉岡はその騒音の原因を、無性に知りたくなった。

扉をくぐったすぐ脇に、受付のような机があり、年老いた男が一人座っていた。男は値踏みするような視線で吉岡を見つめていた。吉岡は男の視線が気になった。その視線は、おまえの全てを知っているぞ、と言っていた。吉岡は男から逃れるようにして階段を下りていった。

三階分、コンクリートの壁しかない階段を下りた。そこで吉岡は目を疑った。

そこには街があった。

実際にはそこにあるのは、街ではなく、活気溢れる市場だった。武道館ほどもあろうかという空間に、所狭しと露店が軒を並べていた。狭い通路が縦横無尽に走り、その通路の両側に乾物を扱う店があり、衣服を扱う店があり、生ものを扱う店、金物を扱う店などがひしめいていた。見渡す限り、小さな露店のような店が並び、ありとあらゆる物品が売られていた。およそ生活用品で手に入らないものはなさそうだ。そして狭い通路を行き交う人々。店主と値段交渉をする人々。狭い通路の片隅で食事を摂る人々。汗ともヒモノともつかない臭いの空気。それは人々の、生のエネルギーが発する臭いそのものであった。

井之方は市場の中央に吉岡を率いていった。喧噪の中、迷路のような路地を進み、裸電球で照らされた、雑然とした店をいくつも過ぎた。どこをどう歩いたのか分らないが、格子状の囲いが閉まった店の前に出た。

井之方は囲いを開けながら

「どや、すごいやろ」

と言った。

何に対して言ったのか定かではない。それでも雰囲気のにまれた吉岡は、黙って頷いていた。

井之方の店は他の店と少しばかり雰囲気が違った。他の店のような、雑然とした雰囲気が無かった。三畳ほどの商区画には、何やら小瓶が入ったケースが積み上げられていた。

吉岡の視線に気が付いたのか、井之方は

「うちは幸福を売る店や」

と言った。

「幸福？」

「そや、幸福市場や」

井之方はケースから瓶を一本取り出し、吉岡に渡した。牛乳のような瓶には

「幸福ドリンク 幸福産業」

と黄色の塗料で印刷されていた。なるほど幸福を売る店だ。

しかし問題は瓶の中身である。黒っぽいどろどろした液体が入っている。見た目はタールに似ている。幸福といった雰囲気ではない。飲みたいと思う人間が何人いるのだろう。吉岡が何の気なしに瓶を眺めていると、一瞬液体の内部で青白い光がほのかに、まるで、青い炎が静かに揺れるように光るのが見えた。驚いてじっと目を凝らしたが、それきり光は現れなかった。もしかしたらただの目の錯覚だったのかもしれない。

「今日は見学だけや。そやけど、明日からはあんさんに商売してもらおうで。しっかり見といてや」

井之方は吉岡を横に座らせると、てきぱきと開店の準備を始めた。そして小さな机の上に小型のノートパソコンを用意した。

「今日びの商売人はこれや。これが使われへんと負ける。あんさんパソコンはどうや」

前の仕事で多少の経験はあった。頷くと井之方も満足そうに頷き返した。

店を開けて小一時間が経った。こんな不気味な飲み物を誰か買うのか、と思っていたのだが、意外にも幸福ドリンクの売れ行きは悪くなかった。経営者然とした人物が、数ケースを買っていったり、あまり幸福そうに見えない人物がやってきて、二、三本を買い、逃げるように帰っていった例もあった。

市場の閉まる午後七時には、店先に積み上げてあったケースの、大半が売れてしまった。

井之方は売り上げをパソコンに打ち込みながら、札束を集金袋に詰め込んだ。集金袋はあっという間に札束で一杯になった。そこから二枚の一万円札を引き抜くと、井之方は吉岡の目の前につきだした。

「電車賃や。明日は朝七時にここに来てや。入口で井之方商会の吉岡言うたら分るようにしといたる。時間は長いけど、その分はずみすすさかい、よろしゅう頼んまっせ」

吉岡が金を受け取ると、井之方はパソコンに向ってなにやら始め、もう吉岡の方など見ようともしなかった。店を出たが出口が分らなかった。帰り支度を始めている店も結構あり、人の流れについていくと、入ってきたときと同じ階段にたどり着いた。階段を上り、ビルの外へ出ると、すっかり夜であった。さっきまでの喧噪がまるで嘘のようだ。外には外の喧噪がある。電車の音、車の音、様々な音。だがあの市場のような、エネルギーギッシュで圧倒されるような音ではない。吉岡はなにか得をしたような気持になった。ガード脇に駐車されたベンツには駐車違反の札が付けられていて、さらに屋根に空き缶が数個乗っていた。井之方の、ここらの顔、という言葉はどうやらはったりらしいが、金回りは良さそうだ。吉岡はしばらく、この降って湧いたような仕事をするにことにした。

朝七時に御徒町の市場に来て、一日忙しく奇妙なドリンクを売り、夕方集金にくる井之方から日当を貰う。そんな日々が続いた。金は着実に溜まり、足立の世話にならず、一人暮らしが出来る日も近いように思われた。美子にはよく嫌味を言われたが、自分で稼ぐようになると自分に自信がもて、あまり気にもならなくなった。どうせならと思い、食費を渡そうとしたが、足立は頑としてそれを受け取らなかった。どうしてと聞いても、幼なじみなんだから助けるのは当たり前だ、それより借金返済に充てろ、と言って笑うばかりだった。

働き初めて三週間が過ぎた。仕事にもすっかり慣れ、余裕が出てきた。同時に今まで思いつかなかったような疑問が、沢山頭をもたげ始めた。吉岡は井之方の素性をほとんど知らなかった。雇われているというのに、事務所すら知らない。それに市場にやってくる客たちが、一体どこから入ってくるのか。この市場の存在自体どこで聞いてきたのか。全くもって謎だった。

吉岡が入ってくる入口は、どうやら従業員専用らしくて、いつもは鍵が掛かっていた

第一入口にいる男に、値踏みするような目で見られては、普通の客は気味悪がってはいるまいだろう。他に入口があるのだろうと、仕事帰りにぐるりと外を廻って見たことがあった。だがそれらしい入口はおろか、看板の一つもなかった。市場を一週してみればわかるのかもしれないが、店を空けるわけにはいかない。店を離れられるのはトイレの時くらいだ。それに市場の通路は実に複雑だった。格子状に出来ておらず、下手に動き回ると自分の店が分からなくなる可能性があった。吉岡は入口から店までの通路、トイレとカラスのような顔をした主人がいる食事をする店以外は、ほとんど足を踏み入れていなかった。迷子になるのが怖くて、見て歩く気になれなかった。市場自体の活気と喧噪は好きであったが、売る側としてそこにいるのだから、何もぐるぐると歩き回ってまで体感する必要はないと思っていた。

吉岡が朝七時に、いつものように店を開けに来ると、何故か朝から井之方がいた。

「どうしたんですか」

「今日は視察が入るんや」

「視察？」

「そや。役所の連中が、わいらが真面目に働いてるか、ルール守ってやっとなるかを見に来よる。ご苦労なこっちゃ」

その日はどことなく市場全体の雰囲気はいつもと違った。なるほど役所が来るというので、浮き足立っているのだ。

吉岡はいつものように、幸福ドリンクのケースを売りやすいように並べる作業を始めた。すると市場全体に、さっと幕を引いたような、妙な沈黙が流れた。どうやら役所のお出まじらしかった。あれほどの活気が引いてしまうとは、一体どんな連中なのか。どのような視察をするのか、吉岡には少し興味があった。

「なんだかみんな、ずいぶんと緊張してますね」

「役所の視察でボロが出ると、営業許可を取り消されてしまうんや。そやからみんな必死や」

「ずいぶん厳しいんですね」

「ここに進出したがってる連中はぎょうさんおるからな。あかん店はどんどんと入れ替える。違反をしても取り消し。売り上げが少なくても取り消し。商売は厳しいんや。まあうちは大丈夫やけどな」

吉岡が何か言いかけるのを井之方が制した。

「お出まじや。あんさんは何もせんでええ。全部わしがやる」

ぞろぞろと背広の連中がやってきて、ここら一体の店舗を厳しくチェックし始めた。しかしすぐに妙な違和感を覚えた。井之方は役所と言っていたし、背広姿も確かに役人っぽい。だがどこか雰囲気や物腰が役人のそれと少し違う。どちらかと言えば、裏の世界の人間みたいに見えた。怯えた店主たちの対応が、そう見せているのかもしれない。

井之方商会にもついに役人がやって来た。井之方は指定の書類を差し出すと、質問されたことにこまごまと答えていった。どうやら一日の来客数や、売り上げも確認されてるらしかった。役所はなんでそんなことまで調べるのだろうか。この奇妙な地下市場は役所の管理で行われているのだろうか。

そんな漠然とした疑問を考えていて、吉岡はとんでもないヘマをやってしまった。井之方が吉岡に向ってなにか声をかけた。ちょうどその時、どこを走っているのか、近くを走っているらしい地下鉄の騒音と振動が、がたがたと市場を揺らした。吉岡は聞き逃した言葉を聞き直そうとして、慌てて駆け寄り、積み上げてあるケースにぶつかってしまった。そして一番上のケースを落としてしまったのだ。大きな音が市場内に響き渡り、静かなりにも多少あった物音が全て止んだ。市場全体が死んだように静かになり、誰もが音の原因に注目しているのが分った。落としたケースのうち、数本が割れて中身が飛び散っていた。

吉岡は慌てて謝ろうとしたが、井之方の顔から血の気が引いていくのを見て、言葉を失ってしまった。もしかして商品を落としてしまったという、たったそれだけのことで井之方は営業許可を失ってしまうのだろうか。吉岡は責任は全て自分にあるのだから、そんなことはしないでくれ、と役人に訴えようとし、役人を見た。そして凍り付いてしまった。

トカゲのような、銀色の目がじっと吉岡を見据えていた。その目以外はどこにでもいるただの男なのだが、その目が吉岡に人間と違う別の何かを連想させた。銀色の目は瞬きひとつせず、吉岡を見据えていた。吉岡は完全に飲まれてしまった。背中を冷たい汗が流れ、足ががたがたと震えた。どうすればいいのかを必死に考えようとするのだが、頭の中が真っ白になり、ものが考えられなくなった。じんじんと首筋が痛み出し、気が遠くなった。そして吉岡はどさりと床に崩れ落ちた。

気が付くと布団に寝かされていた。

三畳ほどの狭い部屋だ。傍らに井之方があぐらをかいていた。

「すみません」

起きあがろうとする吉岡を井之方が制した。

「心配せんでゆっくり休みや」

「店はどうなりました」

「今日はしまいや。視察の日は客もよう来いへんし」

「いえ、営業許可の方です。私がヘマをしでかしてしまったから、取り消されたなんてことはないですよ」

井之方は大声で笑った。声が狭い部屋に響いた。

「大丈夫、大丈夫。あの程度で取り消されるような下手な商売はしてへん。うちは優良店なんや。それよりあんさんの方が心配や。大丈夫か」

井之方は額に手を当てた。熱などないのは分かっているのだろうが、他にどんな仕草をしたらいいのか分らなかつたらしい。しっとりとした感触が伝わってきた。

「大丈夫です。ちょっと気分が悪くなって。すみません。ご迷惑をおかけしました」

「あいつは虎間いうやつでな。ああやって人を脅すのが趣味みたいなやつや。ほんま嫌なやつちゃ。まあ役人なんて、どいつもこいつもろくな奴がおらんけどな」

井之方はゆっくりやすんだらいい、と言いながら立ち上がった。

「店は閉めてしもうたし、気分がよくなったら帰ってもろうてもかまへんで」

井之方が部屋を出ていった後も、しばらく横になっていたが、気分はすっかり元にもどっていたので、吉岡は店に顔を出してから帰ることにした。布団をたたみ、ベニヤ板で覆われた引き戸を開けると、そこが倉庫かなにかの一角であることが分った。一面段ボールに入った商品が積み上げられていた。

吉岡はちょっとした好奇心にかられ、どのような商品があるのかを見て回った。たわし、鍋、するめに鯖缶詰、ゴム手袋、下着、サンダル。なんの脈略もない生活用品が無造作に積み上げてあった。

そして幸福ドリンクの文字が目に入った。牛乳を入れるようなプラスチックケースが、肩の高さまで積み上げてあった。明日の分であろうか。覗くと半端に瓶が入ってるケースがあった。吉岡はすぐにそれが、自分が落としてしまったケースであることに気が付いた。割れてしまった分が半端になっているのだ。ケースの底がまだドリンクで濡れていた。

吉岡はふと、幸福ドリンクはどんな味がするのだろう、と思った。あれだけ売れ行きがいいのだから、さぞかし旨いのだろう。販売する者が、その味を知らないというのは問題だ。井之方に言って一本売ってもらおうと思ったが、一本千円だ。ちょっと牛乳瓶程度の量に千円は払えないと思った。幸い誰も見ていない。井之方は気が付くかもしれない。その時は日当から引いて貰おう。

吉岡は一本を手にとった。ふたを取り、臭いを嗅いだ。何となく甘ったるい臭いがした。目の高さに掲げた時、一瞬、黒っぽい液体の中を、青い光が泳ぐように動いた。吉岡は飲むのを止めようと思いついたが、ふたを開けてしまった以上、元にも戻せなかった。やむなくほんの一口、口に含んでみた。

まずかった。

漢方薬のような苦みとコクがあり、甘さは全くなかった。

どうしてこんなまずいものを、ケースで買ってゆく人がいるのだろうか。吉岡は不思議で仕方なかったが、ふと気が付いた。もしかしたら、このドリンクは動物用なのかもしれない。どうりで街で見掛けたことがないはずだ。そう思うと途端に不愉快な気持ちになり、吉岡は残りのドリンクを流しに捨てた。結局その日は帰るまで気分が悪かった。

天岳寺に戻ると、玄関に見慣れない靴が一足あった。客だろうか、と思いながら廊下を進むと、居間にいる美子がうつむいているのが目に入った。どうも様子がいつもと違うので、何かあったのかと、居間に足を踏み入れた途端に身体が硬直した。

居間には狸のような顔をした五十がらみの男が一人、座卓に肘をついて煙草を吸っていた。

男は吉岡を見るなり、ぎりぎりまで吸っていた煙草を、苦々しい顔をしながらもみ消した。

「吉岡さんですな」

煙草の吸いすぎでざらついた声だった。男はベッコウの眼鏡の奥から、狡猾な目で吉岡を見据えていた。相手を見下した傲岸な雰囲気といい、借金取りに違いなかった。

「私は東映金融の合田といいます。どういう目的でここにいるかは、今更言わなくても分ってますよね」

吉岡は頭の中が真っ白になった。今のいままで、自分はもう借金とは無関係だ、とどこかで思っていた。だが、そんな甘い妄想が音を立てて崩れ去った。

「東映なんて金貸しから借りた覚えはない、って言いたいんでしょう？でも払って貰わないと困るんですよ、うちも。三共銀行さんにね」

合田は集金鞆から書類の束を取り出すと、力任せに座卓に叩きつけた。

「こんな糞みたいな債権押しつけられてね。どれもこれも焦げ付いたものばかりだ。こっちもこれを回収しないと、首をくくらなきゃいけない」

合田は立ち上がり、吉岡に歩み寄ると顔をぎりぎりまで近づけ、ねっとりとからみつくような視線で睨め付けた。

「分ってもらえますよねえ。その辺の事情は」

合田はしばらく吉岡を下から見上げていたが、吉岡が口も利けないのを見て、座卓の書類をしまい始めた。そして背を向けたまま言った。

「私が帰り支度をしているので、ほっとしているでしょう。今日はもう帰りますよ。他にも廻らなきゃいけない所もあるんでね。そっちはあなたよりもっと始末が悪い。今日回収できなければ、身体の一部でも貰わなきゃならないかもしれない」

そして吉岡の脇を抜ける際に付け加えた。

「逃げたければ逃げてもいいですよ。絶対に見つけだします。こっちもプロですからね。じゃあ一週間後にまたきます。そのときまでに半分だけでも用意しておいてください」

合田はどすどすと廊下を踏みならし、玄関を開け放ったまま去って行った。

なんということだ。こんなところまで手が回るとは。今までもそうであったが、吉岡は彼らに見つからないよう、かなり気を配ってきた。しかしここ数日、仕事が見つかったせいか、浮き足立っていたのかもしれない。自分は借金を背負い、追われる身だから仕方がないが、足立夫妻には本当に申し訳ないと思った。吉岡は美子に謝ろうと目を向け、美子が身を硬くするのに気が付いた。知り合いの視線を避けるような仕草。すぐにぴんときた。あの合田といういやらしい男は、美子に何かしら手をだしていたのだ。きっと自分に対する見せしめのためだろう。

吉岡は何も言うことが出来ず、黙って頭を下げると部屋に下がった。

親友の妻が自分のせいで汚された。

その事実がもっと心に衝撃を与えていると思っていた。ところが何の感慨も湧いてこなかった。非道な行為である。いくら美子とあまり反りが合わないといっても、決して許されることではない。なのに何も感じない。吉岡は自分自身にどうしてしまったのか、と問いたくなかった。

それにあの借金取りのことも気になった。当然返せるような金などない。一週間後に来られてもどうにもならない。

だからどうなのだ。

という気持だ。見るからにやり手の回収屋だ。暴力で脅すだけでなく、逃げ道を塞ぐ手を知っている。

しかし恐怖は感じなかった。

最初少し驚いた。だが後はずっと冷めた目で見ていた。合田にしてみれば口も利けない風にも見えただろう。

台所で包丁の音が聞こえた。足立が帰ってから飲む、酒のつまみでも作っているらしい。吉岡は布団に潜り込み目を瞑った。幸いにして眠気はすぐに訪れた。



一週間は瞬く間に過ぎた。

金は無かった。だが不安も無ければ、恐れも無かった。一週間の間に起った変化といえば、あれほどまずいと思った幸福ドリンクにまた手を出したことと、人生を少し前向きに考えられるようになったことだ。

二度目に幸福ドリンクを飲んだ時、一度目よりも更にまずいと感じた。それでもどういふ訳か、最後まで飲み干した。後味も最悪だったし、しばらくの間気分がすぐれなかった。

それでも吉岡には確信があった。絶対にまた手を出すと。

幸福ドリンクには何か依存性の高い成分が含まれているに違いない。それがあれほど売れる理由であるし、こんな地下で販売している理由でもあるのだろう。

幸福ドリンクには、更にもう一つ飲みたくなる理由があった。なんとなく元気が出るのだ。借金の期限が来て、手元には大した蓄えもないのに、なんとなく肝が据わった状態でいられるのも、幸福ドリンクのお陰のような気がした。

いつものように、幸福ドリンクを怪しげな人々にケースで捌き、一日が終わった。御徒町のガード下で、軽く一杯引っかけ帰宅した。

夜、駅の高見から見る天岳寺は、町を飲み込むように黒々と増殖した、生き物みたいなに見えた。どこか不吉な雰囲気を見せていたが、ドリンクのせいも軽く受け流すことができた。きっと寺には合田が来て、吉岡のことを待っている筈だ。以前の吉岡であれば、もう一步も足が前に出ないところであった。ところが、どうにでもなれ、と腹を括ってしまうと、自分の家なのだから帰って当然と思えた。

住宅街を抜け、あと一つ二つ角を曲がれば、天岳寺の鳥居が見えるところで、吉岡は前方に誰かがいるのが目に留まった。街灯から少し外れた場所に立っているため、影で顔までは解らないが、女の子だろうということは解った。なぜこんな人通りの少ない場所に、ぽつねんと少女が立っているのか。あまり深く考えずに、横を通り抜けようとしたそのとき、吉岡は思わず、あっ、と声を上げた。慌てて少女の顔を確認しようとしたが、少女は素速い動きで駆け出すと、さっと路地を曲がってしまった。

「そんな馬鹿な」

他人のそら似に違いない。

吉岡は必死でそう思おうとしたが、心の奥底ではその考えが間違っていると解っていた。あれは間違いなく幸恵だ。水上幸恵に違いなかった。あの横顔を何度盗み見たことか。幸恵は吉岡の初恋の女性だった。見間違えるはずなどない。そして決してばったり出会うこともあり得ない。幸恵は高校に入学してすぐ、交通事故で死んだのだから。

吉岡の頭に次から次へと、幸恵との思い出が蘇ってきた。

「そんな筈はない。幸恵は死んだんだ」

そう声に出すと、駆けめぐる思い出の数々を心から締め出し、天岳寺に向かって駆けだした。

玄関に駆け込んだ時、吉岡は息も絶え絶えの状態だった。だから奥で何が起っているのか、すぐには気が付かなかった。足立は今日も法事で出かけている。そして台所のあたりで人がもみ合うような音がした。

台所に駆け込むと、合田が美子を押さえつけ、人相の悪いちんぴら二人がにやついて見ていた。

「止めろ」

合田がおっくうそうな視線を向けてきた。

「遅かったじゃないですか。逃げたかと思いましたよ」

「その手を離せ」

合田は鼻を鳴らしてから、美子を押さえつけていた手を放した。支えを失った美子はそのまま床に崩れ落ち、すすり泣き始めた。

「ちえ。女の泣き声は嫌いなんだよな」

合田はつぶやきながら、勝手に冷蔵庫の扉を開け、中を物色し始めた。そしてビールが無いことに対して、ひとしきり文句を垂れた後、適当に瓶を一本引き抜いた。

「それより、金はできたんでしょ。今日はきっちり払ってもらいますよ」

呆然とする吉岡に合田が迫った。金の回収専門の男だけあって、腹に響くような声で迫ってきたが、吉岡が呆然としてしまったのはその声のためではなかった。吉岡には信じられないようなことが、同時に二つ起きたためだった。

一つは、合田の手に持たれた瓶だった。一昔前の牛乳のような瓶に、黒っぽい液体が満たされていた。瓶には幸福の黄色い文字が見える。幸福ドリンクに違いない。吉岡が凝視していると、それに応えるかのように、液体の中で何やら青っぽい光が一瞬揺らめいた。

まったく気が付かなかった。辺りを見回せば、床には数本の幸福ドリンクの空瓶が並べられていた。そういえば、以前この空き瓶のことで、美子に癩癩を起こされたことがあった。

そしてもう一つは、合田がすごんだ一瞬、何かが合田の背中にさっと飛びついたためだった。今は合田の影になって見えないが、ほんの一瞬見た姿は、猿のようであった。

急に美子が、ひゃっ、と声を上げた。美子は合田の背中を恐怖の目で見ていた。

その声に合田が振り向き、吉岡に背中が見えた。吉岡も思わず息を飲んだ。合田の背中に飛びついたのは、猿などではなかった。背中には全裸でやせ細り、目がぎらついた老人とも幼児ともとれる、小人のような生物かがへばりついていて、髪の毛は一本もなく、皮膚はざらつき灰色で、汚らしいシミがたくさん浮いていた。頬はこけ、にやつく口元からは乱杭歯が覗いていた。骨張り、ねじ曲がった爪の伸びた指が、しっかりと合田の肩に食い込んでいた。

「何だい奥さん。またいい思いがしたいのかい」

合田がいやらしい笑みを美子に向けると、またしても不気味な小人がどこからともなく現れ、合田の背中に飛びついた。合田はそんなことに全く気づかず、再び吉岡にすごんだ。

背中の小人に血の気を失った吉岡を見て、合田はなにやら満足したらしかった。自分の脅しが利いていると思ったのだろう。合田は一旦吉岡から視線を外し、幸福ドリンクを一気に飲み干した。

「うえっ。何だこりゃ。くそ不味い。何でこんな不味いもん置いておくんだ」

合田は瓶を美子に投げつけた。瓶をぶつけられた美子がまた悲鳴を上げた。

「ええっ？どうなんだい。金は用意できたのか」

黙って首を振る吉岡に、合田は思った通りだとはつぶやき、まな板の上の包丁を掴んだ。「金が無けりゃ、身体で払ってもらおうか。お前腎臓は健康だよな。それとも角膜にするか。一番いい値になるのは心臓だけだな。どこがいい？」

合田はそう言って包丁を吉岡の目の前に掲げ、一人で狂気めいた笑い声を上げた。すると冷蔵庫の裏の隙間から、例の小人が二、三匹飛び出してきて、合田の背中にまたへばりついた。そのショックでか、重みでなのか、合田がぐうっとうなり声を上げた。

「今夜は何だか調子が悪いや。さっきの不味いジュースのせいかな」

だが合田はまたしても包丁を吉岡に向けた。するとまた、今度は食器棚の影から連中が飛び出し、足と言わず手と言わずに飛びついた。いつの間にか、合田にはすさまじい数の小人がまとわりついていて、そしてその小人たちは一斉に、不釣り合いなほどの大きな目を剥き、何かを待つような表情をした。

次の瞬間、吉岡は世にもおぞましい光景を目にした。合田が脅し文句を言い始めた

瞬間、小人たちが一斉に合田にかみついた。そして合田の身体から何かを吸い取り始めた。見る見る合田は勢いを失い、どんよりとした目つきになった。それと裏腹に、小人たちの腹が妊婦のようにふくれていった。小人はバレーボールほどまで腹をふくらませると、熟した実が枝から落ちるように、ぼとりと床に転げ落ち、しばらくもがいた後、緩慢な動きで出てきた隙間へと引き返していった。

最後の一匹が合田から転げ落ち、重たい体を引きずるように姿を消すと、幽鬼のような合田が残った。あれだけ噛みつかれたのだから、傷だらけかと思えば、どこにも傷も無ければ、血も滲んでいなかった。ただ全ての精力を吸い取られたようで、合田には最初の生気が全く見られなかった。そして前後にしばらくふらふらと揺れたかと思うと、ぱったりと床に倒れ込んだ。

慌てて合田の手下が引き起こしたが、合田はまるで泥酔した酔っぱらいのように、力無く手下の肩にぶら下がるだけだった。

「兄貴、しっかり」

まるで反応のない合田に、手下たちも泡を食って、どうすればよいのか解らない様子だった。揺さぶってみたり、頬をはたいてみたりしたが、全くだめなので、ついには、手下に引きずられるようにして合田は出ていった。

「畜生、覚えているよ」

手下は捨て台詞を吐いて出ていったが、誰に言ったのかも定かでないほど、力無い言葉だった。

吉岡は自分が気がふれたのではないか、と思った。

転がるようにして寢室に駆け込んだものの、さっきの光景が目に焼き付き、恐ろしくて目を瞑ることができなかった。電気を消すこともできず、部屋の隅、何も隙間がない壁に背を張り付け、膝を抱いた姿勢で身動き一つしなかった。そして筆筒と壁の隙間を睨み付けていた。ひよっとすると、あの小人がいるかもしれないからだ。

もしあの小人を見つけてしまったらどうしよう。

そう思いながらも、恐怖にかられてそこから目を離せないのだ。さらに筆筒の隙間はおろか、布団との隙間にいるかも知れない。あれだけの隙間に隠れることができるのだから、布団の隙間にも不思議ではない。そう思うと、布団に寝ることもできなかった。家鳴りがすれば身を固くし、風が窓を揺らせば冷や汗をかいた。

しばらくの間は神経を研ぎ澄まして監視をするのだが、やがて疲れて瞼が重くなった。そして頭の中で再びあの小人が跋扈した。その光景に驚き飛び起きた。神経が張りつめ、気が狂いそうだった。

やがて、あの光景は、全て幻覚だったのではないか、と思い始めた。現実的にあのような小人が存在するわけがない。壁との隙間から這いだし、人に飛びついて生気を吸い取る。まるで妖怪じゃないか。そんなものがあるはずがない。そう考えれば考えるほど、自らの目で見えた光景が信じられなくなった。

ではあの光景は何だったのか。

幻覚か。

幻覚で人が倒れたりするものだろうか。そんなことはあり得ない。

じゃあ何なのか。

考えても答えは出ず、混迷するばかりだった。

緊張と混迷に叩きのめされ、くたくたになって朝を迎えた。一睡もできなかった。空が明るくなり始め、部屋が妖怪の跋扈する暗黒から、青い世界へと変貌していった。

ふと部屋の隅に何か転がっているのが目に留まった。

幸福ドリンクの瓶だった。合田が美子に投げつけたものを、知らず知らずのうちに掴んでいたのだろう。瓶は青い不確かな世界の中で、唯一確かな存在に見えた。吉岡は継るように瓶に手を伸ばしたが、すんでの所で慌てて手を引っ込めた。

よく考えれば、この幸福ドリンクこそが事の始まりではないだろうか。

不味いくせに依存性がある。止められなくなったころ、死人を見た。幸恵という死人

。そして、不気味な小人の群れ。

美子もまた、幸福ドリンクの常習者なのだろう。だから美子も小人を見た。合田と手下には小人は見えなかった。

吉岡は瓶が急に忌まわしいもののように思えた。

美子はおそらくかなり前から習慣的に飲んでいたのである。台所に置かれた空き瓶の数を見れば、推測は外れているとは思えない。

昨日の晩、美子は恐怖に震え、自らの肩を両手で抱きしめていた。目は宙を見て視線が定まらなかった。完全なショック状態に見えた。そして口早に何かを呟き出した。美子は夫が浮気をしている、と呟きだしたのだ。

美子の話によれば、足立は檀家の女といい仲になり、法事と偽ってはその女と密会を続けているらしかった。それもかなり前からのことで、足立の母が痴呆になり始めたころからのようだ。足立は母親の面倒を全て美子に押しつけ、自分は外の女との情事に溺れていた。そんな状況の中、美子はノイローゼになり、藁をも掴む思いで幸福ドリンクに手を出したようだ。

一通り喋ると、気が落ち着いたのか、美子は冷蔵庫を開けて幸福ドリンクを取り出し、一気に飲み干した。飲み干した後の美子の顔には、心からの笑みが浮かんでいた。美子は笑みを湛えたまま、寢室に引き上げたのだ。

幸福ドリンクは人を幸福な気持ちにさせる。

そして、そのことは吉岡もまた身をもって実感していた。些細なことがまったく気にならなくなり、人生を前向きに考えられるようになった。本来ならば震え上がるような、合田のような借金取りにも、恐怖を感じなければ引け目も感じなかった。それこそが

幸福ドリンクの効果ではないのか。

吉岡は空恐ろしくなった。

今はまだ、飲み始めて日が浅いが、このまま習飲を続ければ、昨日の美子のようになる。どんな恐怖も飲み込まれてしまう。

吉岡は御徒町に向かった。井之方に仕事を辞めると言うつもりだった。これ以上続けるわけにはいかなかった。始発の電車に乗るつもりでホームに立った。ホームには結構な人がいて、電車を待っていた。始めのうちは寝不足と疲れで、頭に霧がかかったような状態だったため、普段との違いに気が付かなかった。しかし始発電車がホームに滑り込んでくる直前、向かいのホームに水上幸恵が立ち、じっと自分を見つめているのに気が付いた。全身から汗が噴き出し、一步も動くことができなくなった。更に、入線してきた列車の車内に目が行き、愕然とした。車内の至る所にあの小人がいた。小人たちは背広を着たサラリーマンや、清楚な面もちの婦人にへばりついていて、

吉岡は車内に足を踏み入れることができず、ドアが閉まるより早くその場から逃げ出していた。

気が付くといつか立ち寄った公園に来ていた。

吉岡は前に座ったと同じベンチに腰掛けると、頭を抱え込んだ。一体何が起きているのか。あの小人は何なのか。どうしてよいのか全くわからなかった。足立に相談しようか、とも思ったが、それはできない相談だ。足立にはきっと見えないだろうし、厄介になっている身の上だ。唯一見えるらしい美子は、完全に逃避してしまっていた。医者に相談したところで、行き着く先は見えていた。人が見えないものが見えるなどと言えば、鉄格子の中に押し込まれるに決まっていた。

吉岡が出口の見えない袋小路に苦しんでいると、どこからか乾いた笑い声が聞こえた。顔を上げると、前にも見た老人が向かいのベンチに座り、吉岡を見て笑っていた。笑うといっても、決して馬鹿にしたような笑いではなかった。むしろ快活な笑いに近かったが、どこか寂しさの籠もった笑いにも思えた。

「何が可笑しい」

「あんた見えるんだろう」

老人はそう言うと再び笑った。

見える。

老人はそう言った。見えるということがどういうことなのか、この老人にはわかっているのだ。ということはこの老人にも見えるのかもしれない。

だが、この老人は前に見かけたとき、奇妙な振る舞いをしていたではないか。頭がいかにしているのかもしれない。そう思って吉岡は急に可笑しくなった。頭がいかれたような行動をしているのは、まさにこの自分なのだ。他人のことを言えた立場じゃない。

「あなたにも見えるのですか？あれが」

「見えるさ」

吉岡は急に救われたような気持ちになった。と同時に絶望感に打ちひしがれた。老人はどうみても浮浪者でしかない。これが自分の未来なのだろうか。そう思うと気持ちが沈んだ。こんな時に幸福ドリンクがあれば、と無意識に考えていた。そして自分が電車に乗ろうとしたのは、井之方に会いに行くためではなく、再びまた幸福ドリンクを失敬するのが目的だったと気が付いた。

「小人以外には何を見た」

小人以外には死んだはずの少女を見た、と正直に答えた。
すると

「わしは顔のない警官が見えるんじゃ。人に取り付いている姿は小人に見えるが、自分に取り付いた奴は、自分が見たくない姿の物に変身するんじゃ。その方が後で感じる幸福感が大きいからな」

「つまり、端から見れば、自分にも小人がへばりついていると」

「まあ、そういうことだ」

「やつらは何者なんですか」

「略奪者じゃよ。幸せを奪う略奪者じゃ」

幸せを奪う略奪者。意味するところは明白だが、実際にそんなことがあり得るのだろうか、と考え、合田のことを思い出した。奴らは合田から何かを吸い取っていた。吉岡は自分にもあの小人が取り付いている、と思うとぞっとした。

他にも老人に聞きたいことが山ほどあった。なぜ小人は自分に取り付いたのか。なぜ自分にはやつらが見えるのか。幸福を奪われるとは実際どういうことなのか。何から聞けばよいのか考えあぐねていると、突然老人の表情がこわばった。老人は公園の入り口を見据えたまま、僅かに頬を振る寄せた。顔の無い警官が現れたのかも知れない。吉岡が老人の視線の先に目を向けたと同時に、老人は足早に去って行った。公園の入り口には顔の無い警官も、小人もいなかった。そこに立っていたのは足立だった。

「あの男とは関わらないほうがいい。頭がいかれているんだ」

足立は吉岡の前に立つと、そう吐き捨てた。そして老人が立ち去った方を、忌々しげな視線でいつまでも睨み付けていた。

なぜあの老人を目の敵にするのか、それが吉岡にはよくわかった。あの老人はことあるたびに、足立に小人のことを忠告したのだろう。あんたは幸福を吸い取られている。その原因はあんた自信にある。とかなんとか。

そのことを証明するように、足立の背中には今も小人が数匹取り憑いていた。小人たちは時折、思い出したように首筋まではい上がってくると、足立の首筋に噛みつき、少しずつ何かを吸い取っていた。その都度、足立は無意識に痙攣のように首を傾げた。

足立はしばらく無表情で吉岡を見つめていたが、やがて意を決したように口を開いた。

吉岡はてっきり非難の言葉が出てくるものと思っていたが、驚いたことに足立の口から出た言葉は謝罪だった。

「吉岡、済まない」

足立はただ一言だけそう言ったのだ。

意味を問い質す間もなく、足立は吉岡に背を向けて立ち去った。吉岡は足立の力のない背中に投げかける言葉を見つけれなかった。

ぼんやりと地面に視線を落としたとき、あるものが目に入った。幸福ドリンクの空き瓶だった。足立の家を飛び出したとき、無意識に持ってきたのだろう。その瓶を見つめているうちに、あることに気が付いた。全ての謎を結ぶ線のあるのはこの幸福ドリンクだという事実。小人だって幸福ドリンクを飲むまでは目にもすることもなかった。この幸福ドリンクの先にいるのは誰か。井之方だ。やはり井之方に会わねばならない。

御徒町に着いたのはもう夜の九時過ぎだった。公園を出たのは昼過ぎだったような気がするが、もっと遅かったのかもしれない。それにしたって時間が経ちすぎている。どうしてこんな時間になってしまったのか、吉岡には皆目見当もつかなかった。実際は乗り換えの度に、ホームで放心している時間がかなりあったのだが、吉岡自身は全く記憶していなかった。

夜になると、繁華街の灯りから取り残されたビルは廃墟のように見えた。ただでさえ薄汚れた扉は、人を拒んでいるようにすら見えた。吉岡はかまわず建物に足を踏み入れた。ひどくこだまする跽音が耳障りであった。いつもならば、開けた瞬間に地下からの熱気が伝わってくるのだが、夜は妙にひんやりとしていた。

吉岡は階段を半分ほど下りたところで、こんな時間に井之方がいるはずがないと思いついた。あまりの愚かさ加減に泣きたくなった。市場を閉めるのは夜の七時である。いくら残務があるとはいえ、こんな時間まで井之方が残っているとは思えなかった。

それでも吉岡は階段を降り続けた。他に行く当てもなかった。

市場に降りたって、吉岡は言葉を失った。

市場全体に灯りが点いていた。

市場特有の裸電球が、どの店舗にも煌々とつき、辺りを黄色い灯りで照らしていた。だが吉岡の心は急速に冷めてゆき、代わりに静かに恐怖が身を包んでいった。

いつもと同じ灯りが点いているのに、一切が静寂に包まれていた。物音はどこからも聞こえてこず、見渡すかぎり誰もいなかった。なのに明らかに市が立っていた。誰が何のために市を立てているのか。喧噪こそが市場の呼吸であるのに、その呼吸が止まっている。つまり市は死んでいるも同然なのだ。

ここは幸福市場などではない。死の市場だ。足を踏み入れてはいけない。

そう思ったにも拘わらず、吉岡の足は勝手に前に歩み始めた。

だって、帰るところなんてないじゃないか。

まるで足はそう言っているかのように、心を無視して勝手に前に進んでいった。

いつも曲がる乾物屋。誰もいない。裸電球がするめを照らしていた。それはするめではなく、イカの死骸だ。乾物屋の店先に積まれているのは、全て動物たちの骸である。

金物屋の店先には、鋭い刃先の包丁がところ狭しと並んでいた。包丁は銀色に輝き、血を欲しているかのようにだった。

いつも弁当を買う惣菜屋にも誰もいない。鍋からは湯気が立っているが、鍋の中身は一体何なのか。熱で液体が攪拌され、時折何か動物の身体の一部が、浮き上がっては沈んでいった。鍋のどんよりとした臭いが辺り一面に漂っていた。

そうやって眺めるともなしに眺めていると、全ての店がまやかしめいて見えた。扱う商品全てが、死というものに結びついているように思えた。

惣菜屋の角を曲がればすぐに井之方の店だ。所狭しと幸福ドリンクのケースが積み上げてあるのが目に入るはずだ。吉岡は市場に足を踏み入れた瞬間、ある確信を抱いた。井之方は店に必ずいる。どうしてなのかわからなかったが、この確信は決してはずれないだろうと思った。そして誰も人がいないはずのこの市場が、死んでなどいないということも肌で感じた。確かに人はいない。それでも確実に市場は動いている。そう感じた。市場は死というものの最も近い場所で、密やかに動いているのだ。

吉岡は惣菜屋を曲がったところで、驚きで足が止まった。店の前に人がいた。

だが、店の前にいたのは井之方ではなく、合田だった。

合田は店の前で地べたに両手をつき、泣いていた。背中には相変わらず、数匹の小人をまとっていた。

「頼むよ。一本でいいから、一本でいいから譲ってくれ」

合田は人気のない店内に向かって、しきりに懇願していた。欲しがっているのはむしろ幸福ドリンクだろう。中毒になっているのだ。合田は吉岡を責め立てた時の、あの凄みを微塵も持ち合わせていなかった。それにひどくやつれたようであった。そこにいるのはアルコールに溺れた中毒患者と一緒に、吐き気を覚えるほど哀れな男だった。

吉岡はかつて恐怖すら抱いた男に不潔感を感じた。

背中に貼り付いた小人は合田から何かを吸い取り、まるまると太ると、熟れた木の実のようにぽとりと落ちた。そしてころころところがり、驚いたことに井之方の店の中に転がり込んでいった。

吉岡は合田を避けるようにして、店内に駆け込んだ。

小人はころころと転がるようにして、奥の階段から地下倉庫へと下りていった。吉岡もその階段を下りた。そして忌まわしい光景を目にした。小人が大きな桶に、黒い液体を吐き出していた。桶の周りには何匹もの小人がいて、顔をゆがめながら桶に向かって、液体を吐き出していた。桶は黒い液体で満たされ、泡立ち、なま暖かい湯気を上げていた。その液体を別の小人が掬い、瓶に詰めていた。幸福ドリンクの瓶だった。

呆然と立ち尽くす吉岡を押しつけたものがあつた。合田だった。吉岡について侵入したのだろう。合田は湯気の立つ桶に頭を突っ込むと、喉を鳴らして吐き出されたばかりの幸福ドリンクをがぶ飲みし始めた。そんな合田に小人たちはかまう様子もなく、黙々と作業を続けていた。

しばらくすると合田が身をのけ反らした。多量の摂取で過剰反応を起こしたのだ。合田は身体を痙攣させ、床を転げ回った。そして小人のように、口から赤黒い液体を吐き出した。血だった。

合田は咳き込みながら何度か少量の血を吐いたが、落ち着くとまた桶に頭を突っ込んだ。そんなことを何度か繰り返し、合田の身体は血と黒い液体でべとべとになり、床にも赤黒い染みが沢山できた。合田はそんな床に満足げに横たわった。顔は満面の笑みだ。幸福そのものという顔。これが幸福ドリンクの力。どんな状況でも幸福と思わせてしまう。そしてまた、合田の身体に小人たちが群がった。こんなことが永遠に繰り返される。それでも合田は幸福を感じるのだろうか。

どこかで騒々しい声がした。合田を捜しているようだ。吉岡は咄嗟に物陰に身を隠した。

ほどなくして数名の男たちが店内に乱入してきた。身なりからその筋とすぐに分った。手には木刀を握っていた。

「この腐れ外道が。金はどこじゃ」

一人が木刀で小突き回しながら尋問した。幸福ドリンクで落ちぶれた結果、組の金でも着服したのだろう。

「てめえ状況分ってんのか」

一人が胸ぐらを掴み起こし上げた。だが合田の顔から幸福の笑みは消えなかった。完

全に感覚が麻痺しているのだ。

男たちは顔を見合わせた。そして僅かに頷くと手を放した。合田の頭が床に当り、大きな音がした。男たちが木刀を振り上げた。

すると合田の顔から笑みが消え、恐怖の形相になった。死の恐怖はまやかしの幸福より強い。同時に、合田にまわりついていていた小人たちが、一斉に合田から逃げ出した。どの小人もみな怯えた表情をしていた。

次の瞬間、木刀が振り下ろされ、市場に悲鳴が響き渡った。悲鳴ほんの一瞬だった。

男たちが去った後、ザクロのように頭をかち割られた合田と、血の海だけが残った。

その血の海に風もないのに波紋がたった。同時にどこから沸き立つのか、いくつもの気泡が現れては、弾けて消えた。

やがて気泡の合間から黒くて細い手がにゅっと洗われた。手は血を滴らせながら、天を突くように伸びると、唐突に曲がり床を掴んだ。長いかぎ爪が床を搔き、そして引っかかったと思うと、血の中から真っ黒な小人が現れた。

黒い小人は何匹も血の中から現れた。そして合田の身体を取り巻いた。どの顔もみな、一様に恐ろしげで、見る者を怯えさせる表情をしていた。その口には黒く巨大な牙が二本生えていた。

一匹が合田に飛びついた。ほどなくして、他の連中も、巨大な牙を露わにして合田に飛びかかった。黒い小人が合田に食いつくたびに、合田の身体がびくりと動いた。黒い小人は合田の肉を切り裂き、がつがつと食らった。真っ赤な血が飛び、肉片が床に散った。骨は砕かれ、五体はバラバラに切り裂かれた。一瞬の出来事だった。

合田の身体が食い尽くされてしまうと、黒い小人は事務仕事でも終えたかのように、黙って血の海に消えていった。

合田の倒れていた場所には、前と同じように合田が倒れていた。

吉岡は吐いた。

目の前に血まみれの死体が転がっている。だが吉岡を動揺させたのは、目の前で人が殺されたという事実より、あの黒い小人の存在だった。肉を食らうように、一体何を合田から奪ったのか。吉岡は耐えきれずにその場から逃げ出した。吉岡は叫びながら市場の中を闇雲に走った。そして壁に行き当たり、その壁に凭れて泣いた。一体何が幸福なのか。そして桶に黒い液体を吐き出す小人を思いだし、再びその場に吐いた。

ふと気配を感じ振り向くと、吉岡は愕然とした。水上幸恵が立っていた。

「なぜ裏切ったの？」

幸恵が語りかけてきた。

「ありえない。そんなことある訳ない」

幸恵が近づいてくる。悲壮な表情を浮かべながら。

「あなたは私を裏切った」

別の方向から声が聞こえ、驚いて横を向くと、横にも幸恵がいた。同じような悲壮な表情をしていた。

「俺が何を裏切ったっていうんだ。俺はなにも裏切ってはいない」

「あなたは裏切った」

また違う方向から声が聞こえた。うつむいた幸恵がいた。

「私はあなたが好きだった」

「あなたのことをいつも見ていた」

「あなたに思いをうち明けようとしたとき、あなたは私を無視した」

「だから私は死んだ」

「そう死んだ」

「自殺したの。車に飛込んで」

「飛込む前に死の香がしたわ」

「甘美な香」

「甘くて酔いそうな、不思議な香」

「幸福の香に似ている」

「あなたにも嗅がせてあげる」

「ねえ、嗅ぎたいでしょう」

「素敵よ、死って」

「だって死は永遠なもの」

ありとあらゆる方向から幸恵が迫ってきた。どの顔もみな一様に悲壮な表情を浮かべていた。

「止めろ」

何十本という手が吉岡に伸びてきた。と同時に悲壮な表情が崩れ、巨大な口が吉岡に迫ってきた。

吉岡は幸恵たちをなぎ倒し、その場から逃げ出した。あれは幸恵なんかじゃない。小人がそう見せているだけだ。

出口の階段を上ろうとした時、吉岡の足が止まった。階段の上に井之方がいやらしい笑みをたたえて立っていた。

「やっぱり来よったか」

そしてポケットから幸福ドリンクを取り出した。

「これが欲しいんやろ」

吉岡は井之方の方を見もせず、脇を駆抜けると駅に向った。

気が付けばいつもの公園に立っていた。さわやかな夏の朝だった。強くなり始めた日の光が、吉岡のうなじを焼き始めていた。電車に乗った記憶はぼんやりとはあったが、帰ってこようという意志は無かった。ただあの場所から逃げ出したかっただけなのだ。あの何もかも見透かしたような井之方の目が恐ろしかった。

吉岡はベンチに腰掛けると、顔を両手で覆った。その時顔に何か硬いものがぶつかり、初めて手に何かを握っているのに気が付いた。幸福ドリンクの瓶だった。井之方が持っていたものだ。井之方からもらった覚えなどなかった。無意識に井之方からもぎ取ったのだろうか。吉岡は忌まわしげに瓶を投げ捨てた。瓶は縁石に当たり派手な音を立てて割れた。黒い液体が血糊のように広がった。

「何てことをする」

急に誰かに怒鳴られた。この公園で時々見掛けた浮浪者の老人だった。老人は恐ろしい形相で吉岡につかみかかってきた。

「おい、まだ持っているんだろう。よこせ。あれをよこせ」

「放せ。もう持っていない」

「嘘つけ」

老人は骨張った手で吉岡の頬を打った。まるで敵でも見るような目だった。

「よこせ。よこせったら。あれがないとわしは……」

老人は探るように公園の入口に目をやり、顔を強張らせた。

「ああ、頼む。一口でいいんだ。それでやつらから逃げられるんだ」

老人は力無く吉岡の服のポケットをまさぐった。まさぐりながらも入口から決して目を離さなかった。そして急に手を引っ込めると、転げるように逃げ出した。

老人が木々の黒い陰の下を駆け抜けようとした瞬間、陰の中から何かが素早く老人の背中に飛びついた。黒い小人だった。次々に黒い小人たちは陰から這いずり出し、老人の背中にへばり付いた。

もう一步で陰から出るところだったが、すんでのところまで力尽きたように、老人の足が止まった。

小人は右手を高く掲げたと思うと、力任せに老人の背中に打ち付けた。すると手が熟れた柿に指を突き刺すように、ずぶりと老人の背中にめり込んだ。

老人が嘸れた悲鳴を上げた。

血は一滴も出なかったが、小人の手は肘まで老人の背中にめり込んでいた。小人は吉岡の方を向いたまま、手を中で動かした。何かを探しているようであった。小人が手を動かす度に、老人が苦悶の悲鳴を上げた。

やがて小人は目的のものを探し当てたらしく、手を動かすのを止めた。

同時に老人はばたきとその場に倒れ、のけ反って痙攣し始めた。

吉岡は体中に粟粒のような鳥肌が立つのを感じた。恐ろしくて仕方がなかったが、小人の視線から目をそむけることが出来なかった。

小人の表情がいやらしい笑みに変わった。老人は苦しみ、痙攣し続けていた。小人は明らかに老人を弄んでいた。小人は老人の心臓を鷲掴みにしていた。

ついに小人は満身の力を右手に込めた。

老人の心臓は耐えきれず破裂した。老人の身体がびくりと大きく動き、そしてついに動かなくなった。小人が背中から手を引き抜くと、べっとりと真っ赤な血に染まっていた。

突然その小人が吉岡の方を向いた。魔力を持ったような目に吉岡は指一本動かすことができなかった。小人は吉岡に向けてにやりと笑って見せ、そしていつものような素早い動きで木々の黒い陰の中へと消えていった。

吉岡は震えながら老人に近づいた。老人はまるでずっと前からその場所に置かれている物のように、地面に横たわっていた。背中には血の痕はなかった。

吉岡がいつまでも傍らで老人を見つめていると、どこかで女性の悲鳴がした。通りがかりの主婦が走り去っていくのが見えた。

吉岡は無我夢中で逃げた。二つの死が、つぎはお前だと言っていた。しかしあの、隙間から這い出す小人からどうやって逃げればいいのか。見る者誰もが幸恵に見えた。全ての言葉が、死は素敵、と言っているように聞こえた。

天岳寺の本堂に転がり込み、吉岡は頭を抱えて蹲った。恐ろしくてどうしていいのかわからなかった。逃げ出したかったが、どこへ逃げればいいのか見当もつかなかった。気が狂いそうだった。何でこんなことになったのか。何で見たくもないものが見えるのか。考えたくもなかったのだが、思考は同じところを何度も何度も巡った。

やがて本尊の前に人がいるのに気が付いた。僅かに首を右に傾げている。暗がりでもそれが足立であることはすぐに分った。

「足立。頼む助けてくれ。俺どうにかなってしまいそうだ」

足立の足にすがりつく、その足がすっと動いた。足はゆっくりと左に移動したかと思うと、またゆっくりと右に動いた。まるで揺れているみたいに。足立の足は紛れもなく揺れていた。手首に巻き付いた数珠が床に落ちて乾いた音を立てた。

吉岡が見上げると、天井の梁から一本の縄が垂れ、足立の首に絡みついていた。足立の目は飛び出し、口からは涎がしたたっていた。足許には失禁の跡が広がっていた。吉岡が後退るとがらがらと何かをなぎ倒した。幸福ドリンクの空き瓶の山だった。瓶の隙間を何か黒くて小さなものが素早く動き回っていた。

現実と狂気の境は完全に無くなっていった。最早目の前の友人の死は恐怖の対象ではない。床や天井を小人が徘徊し、吉岡の隙を窺っていた。

本堂の扉がゆっくりと開け放たれた。明るい陽の光が足立の宙に浮いた足を照らした。失禁の跡が輝いた。小人が陽の光を避け、本尊の陰に潜り込んだ。入口に井之方が立っていた。いつもと同じ安っぽい背広を着、いつもと同じ笑顔をしていた。

「死によったか。あほんだらが」

井之方は足立の死体に歩み寄ると、足を蹴飛ばした。

「こいつには貸しがぎょうさんあんのや。そやから、たんまり幸福吸い取らせてもらおう思っったのに。ほんまはこいつの先祖がわいら幸福の高利貸しに作った借りやけどな」

井之方は吉岡にいつもは見せない哀れみの表情を向けた。

「こいつの一族はわいらに七百年分の幸福の借りがあったんや。わいらももっと前に回収したかったんやけど、先代までは法力が強うて、なかなか近寄れんかった。こいつは修行もたいしてしとらんから、付け入る隙があった。そこで今度こそ回収したる思って、七百年分返せ言うたら、頼むから子供には手ださんでくれ泣きつきよった。その結果どうした思う」

井之方は吉岡の顔をのぞき込んだ。

「こいつ檀家を売りよった。まだ産まれてもない子供から幸福吸い取らない代わりに、檀家から吸い取れ言うた。お前もこいつに売られたくちや。悪く思わんでや」

井之方がにんまりと笑った。

吉岡は何を言われているのか理解できなかった。

梁からぶら下がる足立の哀れな姿と、謝罪の言葉を言ったときの姿とがだぶって見えた。

何で謝る？分からない。

ただ一つ理解できること。それは恐怖。

吉岡は井之方の感情のこもらない笑みに、背筋が寒くなった。そして不快感で顔を間近に見るのが耐えられなくなった。思わず顔を背けると、井之方のしっとりした手が顎を掴み、強引に正面を向かせた。体中に虫ずが走り、吉岡は井之方を突き飛ばすと、転げるように本堂から庫裡に続く廊下に駆け出た。這うように進む背中に、井之方の声を追ってきた。庫裡に逃げ込むと扉をしっかりと閉めた。これで完全に井之方とは隔絶できた、という安心感で扉に凭れると、信じられないものが目に飛込んできた。

美子の死体だった。

美子もまた、天井からぶら下がっていた。鬱血したうつろな目で吉岡を見下ろしていた。吉岡は悲鳴を上げた。

どこかで鳩が鳴いていた。

熱くなりそうな日差しの午前。清潔な庫裡に電気コードで首をくくった死体は不釣り合いだった。

吉岡は声がかかるまで叫び続けた。

荒い息をしていると、一体どこから入ってきたのか、冷蔵庫の脇から井之方が姿を現した。庫裡への入口は吉岡の背の扉と、正面の引き戸しかない。絶対にどちらの扉も開いていない。そんな疑問を理解しているのか、井之方は相変わらずにやにや笑いを顔に貼り付けていた。

「ここにも現実を直視できなくなった哀れな人間が一人」

井之方は美子の身体を軽く押して揺さぶった。天井がぎいぎいと軋んだ。井之方は片手で美子を揺さぶりながら、笑顔のまま吉岡を見据えた。目は笑っていなかった。むしろ凍り付きそうな程、冷たい視線だった。

「本当に馬鹿な連中や。死んでしまえば全て済むと思うてる。死んでもツケは誰かが払うんや。なあ吉岡さん」

井之方に視線に、延髄がじんじんと痺れた。瞬きひとつしないその目。どこかで見た目。それは虎間という役人の、トカゲのような目と似ていた。あれは人間の目ではない。唐突にそう感じた。そしてその思いは確信にまで高まり、自分の運命が完全に手の内からこぼれ去ってしまったことを悟った。時間すら凍り付き、全ては庫裡という閉ざされた真っ暗な宇宙に閉じこめられてしまった。吉岡がその宇宙から逃げ出せる術はなかった。

「こいつらのツケは、あんさんが払うんや。死ぬまでずうっと。死んだ人間のツケは、その人間のもっとも大事にしている人間が払うと決まっとんのや。その方が幸福度が高いからな。それに」

再び美子の死体が大きく揺さぶられ、天井が軋んだ。

「死んでも搾り取れるもんもあるのや。なんだかわかるか？」

井之方は耳障りな嘎れた笑い声を上げた。

「それは権利や」

物陰で何かが動く気配がした。

吉岡は目を瞑ることも、耳を塞ぐことも出来ず、ただいつまでも笑う井之方を見つめていた。その傍らで、天井からぶら下がった美子に、黒い小人たちがまるでぶどうの房のように群がった。小人たちが旺盛な食欲で、肉を食らうたびに天井が軋んだ。



足立が死んだ後、吉岡は天岳寺を引き払い、小さなアパートに移り住んだ。その小さなアパートで、出口のないトンネルを歩き続けるように、ただ漠然と暮らした。生きる目的もなく、日々小人たちに幸福を吸い取られ、幸福ドリンクを飲んでまやかしの幸福に浸った。葬式にも行かなかつたので、その後の成り行きは知らなかつた。

井之方商会にはもう行けない、と思っていたのだが、気が付けば再び井之方商会で働いていた。どこへ行っても小人を避けられる訳ではないのだ。むしろ幸福ドリンクが手に入りやすいというメリットすらあつた。井之方とはそれなりにうまくやっていた。

しばらく幸福照会で働いて気づいたことがあつた。市場は場所ごとにランクがあるということだ。井之方商会はどうやら一番いいランクにあるらしい。営業許可を失うと、そのランクに下から、大抵は動物じみた顔をした親父のいる、別の店が上がってきた。競争社会というわけだ。

その競争社会で、吉岡は全ての競争から無縁の状態生きていた。ただ黙々と働いていた。

帰宅時の電車で揺られていると、時々猛烈な虚無感に襲われた。周りを見回せば、同じように精気のないサラリーマンたちが、ぼんやりと宙を眺めていた。どの背中にも小人が貼り付いていた。そんな姿を見、自分も同じなのだと思うと、無性に死にたくなつた。だが、死体に群がる黒い小人を見た後では、とても自殺などできるものではない。井之方の言う権利とは、一体何のことなのかかわからないままだが、敢えて井之方に尋ねるような真似はしなかつた。それこそ知らないほうが幸せに違いない。

真夏の暑いさなか、突然アパートに見知らぬ男がやって来た。男は足立の弁護士だと言つた。そして足立の遺言だと言つて、現金をたんまり置いていった。足立がどうして遺言状などに、血縁でない人間を載せたのか。その理由を弁護士は知りたがつた。当然であるが、吉岡は教えるための言葉を持ち合わせなかつた。こつちの世界に足を踏み入れた人間でなければ、到底理解出来るはずもないからだ。吉岡は黙って弁護士が帰るまで座っていた。そして金額を確かめもせず、金が入った封筒を筆筒に仕舞つた。金があつたところで、何が変るわけでもない。所詮はまやかしの幸福しか得られないのだから。結局、大金を手にしたが、生きることも死ぬことも叶わぬ生殺しの日々を黙々と暮らした。

ある朝、ふと目を上げると、青い空の向こうに入道雲が見えた。まるで山のような大きさだ。朝の光を反射し、神々しく輝いていた。頬を涙が伝つた。地獄に堕ちてもいい。死ぬか生きるかのどちらかを選びたいと思つた。全ての事柄に優先すること。それは選択できるということだ。生きることができないなら、死ぬしかない。あの黒い小人たちに切り刻まれるのかもしれないが、それでも希望のない人生が永遠に続くよりはましに思えた。

ただ、黙っては死ねない。借りは返さねばならないものだ。

しばらく探し回つて、ようやく所在を掴むことが出来た。前に天岳寺にやってきた、合田の手下である。名前は武藤と言つた。吉岡は武藤に電話をし、明日の昼に公園で会う約束を取り付けた。武藤からすれば、借金の返済についての相談かと思つたのか、しきりに借りたものは返すのが道理だ、と偉そうに言うので、いい儲け話だ、とだけ言い反応を待たずに電話を切つた。思わぬ入金があつたこともあり、借金はそれなりに返済していた。

翌日、吉岡が公園に行くと、武藤は炎天に焼かれて苛ついていた。武藤の背中にも一匹の小人がへばり付いていた。

吉岡は武藤に金が入った封筒を渡し、自分を殺してくれと頼んだ。前金の三十万円と、成功報酬の七十万円。合わせて百万円の仕事だ。

武藤はしばらく怪訝そうに封筒と、吉岡の顔を見比べていたが、唐突に笑い始めた。

「あほか。どこの世界に自分を殺せって、金払うやつがいるんだ。おめえ、頭いかれてんじゃないのか」

「確かにいかれているのかもしれない。でもよくよく考えてのことだ」

「成功報酬たって、死んじまったら誰から貰うんだよ」

吉岡はコインロッカーの話をした。

「正確に言えば、死なない程度に半殺しにして欲しい。ただ、本気で殺す直前までやって欲しいんだ。そうでないと困る。死の恐怖を感じるのが大事なんだ」

「なんだ、初めからそう言えよ。どっかの組長殺るならまだしも、カタギ殺ったって一文にもならない。要するに病院送りにすりゃいいんだな」

そう言った武藤の目が光った。借金回収に来たときに、合田が幸福ドリンクを飲んで倒れたことを、恨んでいるのだ。吉岡の背筋を冷たいものが走り抜けたが、もう後戻りはできなかった。

「それともう一つ。日時は俺が決める。決まった日にやって欲しい。方法はあんたに任せるよ」

武藤は任せろと言って去っていった。失敗したらどうなるのか。吉岡は慌てて不安を振り払った。もう後には引けないのだ。

月末になり、新入荷の幸福ドリンクが市場に届いた。吉岡は一日かけてそれらを店先に移動したり、倉庫に仕舞ったりした。そして帰り際に瓶を一本引き抜くと、躊躇いもなく飲み干した。もう完全な中毒だ。これがないと一日が終わった気がしなかった。

仕事を終え、外へ出ると結構涼しかった。もう秋も近いのだろう。井之方は明日の準備で忙しく、ほとんど帳場でパソコンにかかりきりだった。混み合う電車に乗り、いつもの駅で降り、駅前の定食屋で夕飯を食べた。カツ丼を食べたのだが、味はほとんど分らなかった。

今日。

今日が武藤との約束の日だった。今日、吉岡は武藤に襲われるのだ。半殺しの目に遭って、病院送りになる。だがしかし本当に武藤は約束を守るだろうか。きっと残りの金欲しさにやって来るだろう。いくら自分で依頼したとはいえ、襲われると分っているというのは、なんとも嫌な気分だった。

アパートへ帰る道筋に、一カ所暗い場所があった。左右を高い塀に遮られ、外灯も少ない。更に塀の切れ目を過ぎると、僅かであるが雑木林があった。暗がり注意と書かれた看板もあるし、実際強盗事件も起きている場所だった。襲われるとすればそこに違いないと思った。

いざ通りに足を踏み込むと、緊張で足取りがおぼつかなかった。大丈夫だと自分に言い聞かせて進んだ。いつ現れるだろうか、と思うと汗が噴き出し、壁に反響する跣音が妙に耳についた。

長い壁の半分を過ぎ、いよいよ雑木林に差掛かった。なるべくそちらを見ないように努めた。不自然な動作があっけはいけない。横で何かがさっと動いた。思わず振り向いたが、何もいなかった。心臓だけが跳ねるように脈打っていた。しばらく辺りに目を配っていたが、何も起らなかった。恐らく、小人だろう。

雑木林が終わり、細い路地がもう少しで終わる。吉岡はがっかりした。武藤は裏切ったに違いない。そう思っていると、枝道から緩慢な動作で男が現れた。武藤だった。肩に木刀を担いでいた。

「遅かったじゃないか」

という言葉が喉まででかかったが、かろうじて押しとどめた。どういう挙動に出るか、様子を窺っていたが、武藤は動く気配を見せなかった。

時間が刻々と過ぎていった。何故武藤は襲ってこないのか。だからといって通り過ぎる訳にもいかない。吉岡は思い通りにならない状況に、焦りを感じ始めた。

すると後方から車が近づいてきた。まずい展開だと思った。第三者に見られるのは計算に入っていない。

車のドアが開く音がした。

吉岡は運命の糸が、手からすり抜けていくのを感じた。全てがご破算になると思いながら、振り向いてぎょっとした。

そこには木刀を持った柄の悪い男が三人立っていた。

「何だお前ら」

男たちの一人が無言で、吉岡の肩口に木刀の一振りを浴びせた。激痛が全身を貫き、鎖骨が折れる音が聞こえた。

「お前ら。こいつ好きに料理せえ」

武藤が仲間に言うが早いか、後頭部に木刀の一撃を受けた。吉岡は目の前が一瞬白くなり、地面に顔面をしたたかぶつつけた。続けざま、木刀の打撃を体中に受け、骨の芯から激痛を感じた。木刀で殴られるというのが、これ程痛いとは思わなかった。

木刀の打撃が止んだ。

武藤が目の前にしゃがんで顔をのぞき込んできた。武藤の吐きかける息を嗅ぎ、吉岡は本当の恐怖を感じた。武藤は酒を飲んでいて、酔っているのだ。

「片付けさせてもらうぜ」

武藤はそう言いながら、酒臭い息を吐きかけてきた。

「おい、話が違うぞ」

吉岡はそう言ったつもりであったが、武藤は全く耳に入っていない様子だった。立ち上がり際に木刀の先を、嫌と言うほど強く叩きつけられた。全身が火の玉になったみたいに、激痛で燃えていた。武藤が木刀を叩きつけてくる度、身体の中を火の竜が走り抜けるみたいだった。

何発殴られたのかももう分らなかった。あと数回殴られれば、本当に死んでしまうだろう。吉岡はもう何でもよくなった。兎に角早くこの苦痛が逃れたかった。わかったから早く殺してくれ。心からそう叫びたかったが、目の前に転がされた物を目にし、自分が本当の死の恐怖と向かい合っていない、ということを感じた。目の前に転がされたのは、鞘だった。武藤が持っていたのは木刀なんかではなく、日本刀だったのだ。かろうじて首を上げると、焦点の合わない目をした武藤が、満足げに笑っていた。磨き込まれた日本刀の刃が、無慈悲に輝いていた。一切の感覚も思考も全てが凍り付いた。

「くたばれ」

武藤が日本刀を振り下ろすのを、吉岡は他人の目のような感覚で眺めていた。なるほど本当に空気を切る音というのはするのだな、と思った。そして刃先が目の前のアスファルトを砕き、小石が顔に当たると、ただ「外れた」と思い、気を失った。

気が付くと窓から差し込む外灯の光が、暗い天井にほのかな陰を作っているのが見えた。その僅かな陰が、日本刀に見え、吉岡は手足を振り回した。ついで激痛が身体を焼き、苦痛にもだえた。

助けてくれ。殺される。

逃げようと必死になればなるほど、打撲で受けた全身が火のように焼け付く痛みを発生した。もがき苦しみながら、ようやく身体を半分ほど捻ることができ、自分がベッドの上にいることに気が付いた。

一体どうなっている。

ベッドの脇にはテレビとカーテン。点滴がぶら下がった吊り具。そこまで見てようやく病院だと気が付いた。

吉岡は安堵のあまり、笑い出してしまった。なんだうまくいったじゃないか。あのときは本当に殺されるかと思った。だが、実際こうして生きているじゃないか。全て思い通りだ。これであいつに一泡吹かせてやれる。吉岡は痛みに顔をゆがめながらも笑い続けた。

だが、そんな陽気な気分もそこまでだった。

「悪かったな。痛い思いをさせて」

闇からの声に飛び上がった。

暗がりから、まるで闇から抜け出たかのように、ずっと武藤が姿を現した。

吉岡は恐怖で息が詰まりそうになった。殺される。遂さっきまで全てがうまく運んだ、と考えていたにも拘わらず、武藤の顔を見た瞬間に恐怖で身体が硬直した。喉がからからに渴き、殺さないでくれと懇願したいのに、声が全く出なかった。

「そんな目で見るとなよ。本気で殺すつもりはなかった。ちょっと飲み過ぎただけだ」

そう言ったものの、あのときそうは思っていなかったことは、武藤も内に認めていた。もし酔って刃先がそれなかったら、今頃はこうしてのうのうとはしていられなかった筈だ。

「それより、残りの金を貰おうか。ロッカーの鍵はどこだ」

辛抱強くまつ武藤に、ようやく鍵の在処だけ伝えたと吉岡は震える手で、出ていけと出口を指し示した。全身が汗でべたべただった。死というものがどういうものなのか、分った気がした。決して甘味なものなどではない。死とは絶望的なほどに無情な力なのだ。全てをはぎ取り、焼き払う圧倒的な力だ。その一端をかいま見てしまった者は、その恐怖の虜になり、決して逃げ出すことはできない。

吉岡は両手で顔を覆い泣いた。涙は涸れることなく、いつまでも流れ続けた。

翌朝、吉岡は病院を抜け出した。電車に乗り、御徒町に向った。行き先は市場だ。何があっても今日は行かなければならなかった。そのために昨日恐ろしい目に遭ったのだ。

しかし、本当に恐ろしい目に遭うのは今日なのかも知れない。そう思うと、吉岡は身体が小刻みに震えた。あれ以上の恐怖などというものが、この世に存在するとは考えられない。だが、もし理解を超えた恐怖があったとしたら。

そんな恐ろしい目に、何故わざわざ自ら出向いて行って遭遇するのか。自分でもはっきりとはわからなかったが、一つだけ言えることがあった。もう終わりにしたかった。意味のない生に終止符を打つのだ。そのために気がふれたとしても、今より酷いことはないだろう。

御徒町の、幸福市場がある雑居ビルには名前がなかった。今まで気にもとめなかったが、よく見れば、屋号もなければ番地のプレートも無かった。目印となるものが何一つない。古びたコンクリートの隅っこに、手あかで汚れた扉があるだけ。そして道路を歩く人々には、まるでこのビル自体が目に入らないかのように、誰もが無然とした表情で通り過ぎていった。入口の前に佇む吉岡に目を向ける人間もいなかった。

暗く汚れた廊下の突き当たり、地下への入口の扉を抜けると、最初の日に吉岡を値踏みした男がいて、やっぱり吉岡を値踏みするような目で見つめた。その目は吉岡から何も読みとってはいなかったし、何かを訴えても来なかった。吉岡は一瞥をくれただけで地下への階段を下り始めた。

階段の途中から市場特有の熱気と騒音が伝わってきた。今日も市場は繁盛しているようだ。この市場にはあらゆるものがある。何に効くのか分らない漢方薬から、時代遅れの便器まで。その中においてあらゆる人間の不幸からできあがっている、幸福ドリンクが売られている。幸福ドリンクを飲めば幸福になる。実に単純なふれこみだが、幸福になるのは飲んだ人間ではなく、それを捌く市場の連中だけだ。

吉岡は階段を下りきり、市場への角を曲がった。煌々と照らし付けてくる、生命感溢れる白熱灯の光。干物の黴と汗の混じったような、独特の臭い。そして途切れることのない騒音。これらが渾然一体となり、市場という巨大な空間自体が生き物のように感じさせる。吉岡は市場が命に語りかけてくるような錯覚を受けた。甘く、優しく、そして深くて暗い闇の声のように。

一步市場に踏み込んだ途端、吉岡耳を塞がれたような、ぼうっとした感じになり、通路を歩いているのは自分の意志なのか、市場の意志なのかわからなくなった。それでも吉岡は井之方商会に向って歩き続けた。

いつもの惣菜屋の角を曲がると、すぐに井之方商会が目に入った。今日は吉岡が遅れたので、井之方自身が列をなす客を捌いていた。客といっても単なる中毒患者であり、将来幸福を吸い取られるだけの存在だ。だがそんなことはもう、吉岡にはどうでも良かった。客を避けて店に入ると、井之方と目が合った。井之方は何も言わなかったし、吉岡も何も言わなかった。ほんの少しの泥臭い間があっただけで、二人は無言で仕事に移った。吉岡もまた、すぐに自分の仕事に熱中し、周りのことなど耳に入らなくなっていた。

一階下の倉庫に降りると、待ってましたとばかりに小人が群がってきた。いままでも地下に在庫を取りに行くよう、よく言いつけられたが、考えてみれば単に小人に餌を与える時間になっただけのことだ。下に降りる度に吉岡は幸福ドリンクをくすね、その作用で僅かな疑似幸福に酔いしれ、そして小人の餌食になった。背中を小人で小山のようにしながら、吉岡は黙々と在庫のケースを上に乗った。時々、満腹になった小人が背中から転げ落ち、重たい体を引きずって品物の隙間へと消えていった。どこかの収集場で腹に溜まった黒い液体を吐き出すのだろう。なぜか今日は小人が禿鷹のように群がってきた。一匹転げ落ちると、別の一匹が空いた隙間にへばり付き、飢えた獣のように幸福を吸い取った。

店にケースを下ろし、空きケースを台車に乗せると、下に代わりを取りにおり、そして小人の餌食になる。そんな繰り返しで時間は過ぎていった。

午後を少し廻った所で、市場の雰囲気は唐突に変化した。急に空気が抜けて萎んでしまったかのように、市場の活気が萎えてしまった。客足が引き、白々とした雰囲気だけが残った。煌々と光る白熱灯の光が痛い程であった。役人たちが来たのだ。

前にも何度か役人は目にしていた。だが、吉岡は最初の時のことがあったので、なるべく奥に引っ込んでいたことが多かった。だから目にするといっても、物陰からそっと覗く程度でしかなかった。

今日も吉岡はいつものように物陰に引っ込んだ。ひっこんでも全ては伝わってきた。この市場という巨大な生き物は、どこで何があっても、それを皆に伝えずにはられないのだ。

空気が冷えたような緊迫した雰囲気伝わってきた。どこかの店が基準にみたく、営業許可を取り消されたのだろう。営業許可を取り消された店主は、蒼白な顔つきで早々に店じまいをする。時に取り乱し、役人に食ってかかろうとする者もあるが、大抵はあの虎間という役人の、トカゲのような視線に見据えられ、何も言い出せないのが常であった。虎間の視線には全てを押さえつけてしまう、圧倒的な力があった。

やがて役人たちが井之方商会にもやって来た。

井之方はいつものように帳簿を見せ、何か細かい説明をし、へこへこと頭を下げていた。井之方商会は堅い商売をしていた。だからつけ込まれるようなところは一つもない。いやなかった。今までは。今日もいつもの通り、形式的に終わるだろう。周りの店も、井之方も、そして役人たちでさえそう思っていた筈だ。

ところが事態は一変した。

一人の役人が商品の味見をして、顔を歪めたと思うと、瓶を床に叩きつけたのだ。瓶が割れる音が、文字通り市場全体に響き渡った。僅かに残っていた市場のざわめきは完全に消え、一瞬一切が静寂に包まれた。

すぐに飲んだ役人が両手で頭を多し、絶叫し始めた。そして駆け出したかと思うと蹴躓いて転んだ。転んでもなお役人は絶叫し続けた。やがて絶叫が最高潮に達したかと思うと、声が徐々にか細くなり、やがてすすり泣きに変った。役人は自らの殻に閉じこもり、幼子のように両膝を抱えて泣いていた。それは本当の恐怖を味わったものの泣き声だった。

吉岡は敢えて外を覗いたりしなかった。井之方が蒼白になっているのは明白だったし、またあのトカゲの目で見られるのは嫌だったからだ。

井之方が言い訳をしようと試みていたが、恐怖で顔が引きつり、あうあうと言葉にならない声を出していた。だがそれも次の瞬間までだった。

「営業許可取り消し」

虎間が死刑宣告のような、深いところに感情を押し込めた声で結果を伝えた。

「せっかくここまで来たのに、残念だな」

虎間はそう言うと他の役人を引き連れ、何もなかったかのように次の店へ移動して行った。

すすり泣く役人は別の役人に引きずられて退場した。

井之方商会の店内では、井之方が呆けたような顔で立ち尽くしていた。吉岡が脇をすり抜けても、井之方は目も動かさなかった。ちらりと顔を覗くと、井之方の顔は一変に百も歳を取ったように老け込んでいた。いや、実際は本当の年齢相応の外見になっただけかもしれない。それはどう見ても人間には見えなかった。どこか人間に似通った、年老いた何者かでしかなかった。そしてその何者かは、完全に打ちのめされていた。

その打ちのめされた井之方を、カラスのような飯やの親父が満足そうに見詰めていた。

市場を出ると、黙って階段を上った。階段の最上段に例の男がいて、またしても値踏みするような目を向けてきたが、それだけだった。どんなに見切ったような目をしたところで、心の底を計ることなどできないのだ。この扉を潜ってしまえば、男は吉岡のことなどすぐに忘れてしまうだろう。

雑居ビルから出ると、吉岡は一度も振り返らずに歩き出した。

足立のお陰で借金を清算できた。元々の借金はかなり莫大ではあったが、回収不能な借金を追い回すより、目先の現金で精算してしまった方が楽だからである。事実、足立が遺族たちに反感を買いながらも吉岡に残した金額は、やくざな金貸しを納得させるだけの金額だった。

吉岡はお陰で一文無しになり、故郷にも居られなくなった。足立の遺族がそれを許さなかった。吉岡自身、別の意味で心に焼き付いてしまった故郷には、いられそうになかった。

今では吉岡は隣町で弁当屋のアルバイトをして、生計を立てていた。借金さえ無くなれば、アルバイト程度の収入でも生きていくには苦にならなかった。それどころか、少し貯金ができたら、自分で弁当屋を開いてみようかなどと思っていた。

毎日、黙々と生きていた。それでもそこには喜びがあった。自分のために生きられるという喜びが。あれから小人は姿を見せなくなった。いわば吉岡はブラックリストに載ってしまったのだ。あの晩の死の恐怖。あれこそが全てを打破する鍵だった。本当の死の恐怖を味わった者は、決してその恐怖の呪縛から逃れることは出来ない。水上幸恵も言っていたではないか。死は永遠だと。死の恐怖もまた永遠なのだ。吉岡の身体には常に恐怖の滴が残り、細い血管の中をぐるぐると巡っている。時々その恐怖は心に引っかかり、増幅されて絶叫を伴う悪夢を引き起こす。両手は脂汗に濡れ、歯の根が合わさらない状態で目を覚ます夜が今だにある。

そして恐怖は伝染するものなのだ。吉岡の味わった死の恐怖は、小人たちに吸い取られ、そして役人の口に運ばれた。あの役人は幸福と一緒に、死の恐怖の一端を味わった訳だ。井之方商会が営業許可を剥奪されても、仕方のないことだ。幸福ドリンクは、たとえ偽であっても幸福を与えるものであって、恐怖を与えるものではないからだ。井之方商会はこの世から消えた。井之方自身も同じ姿でこの世を歩くことはもうないだろう。

井之方が言っていた『権利』というのは、もしかして、人として些細な幸せを甘受する権利なのではないか、と吉岡は思っていた。

そして井之方は人の幸せを奪われ、今はどうしているのだろうか。もしかして一匹の小人となっているかもしれない。

吉岡は死の恐怖をもってして、幸福ドリンクの呪縛から逃れた。

しかし、決して大団円ではない。あれ以来、吉岡は普通に彼ら、人間ではない連中を目に出来るようになってしまった。元来人間の能力なのかもしれない。そして吉岡はそばを着いて離れない不気味な陰を発見した。

それは時折電柱の陰に、隠れて立っていたり、隣のビルの階段から見下ろしていたりした。夏でも冬でも黒いコートを着て、縁のある帽子を被っていた。顔はどうやっても見えない。そして近づくと体中が総毛立つような寒さを覚えた。たぶんあれこそが死に神なのだろう。吉岡は魂を売ったのだから。そして恐怖を得たのだ。次にあの黒い影が嗤う時、コートの下に隠し持った大きな鎌で、吉岡の命の糸はばっさり断ち切られてしまうかもしれない。それでも吉岡は怖くなかった。吉岡は自らのために生きる喜びをうち消すことができないのだった。なぜなら、本当の幸せとは、自分が幸せであることを知っていることであり、生きることでも死ぬことでもないのである。